
さいたま市

釣上礎遺跡

岩槻南部新和西特定土地区画整理事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2008

さいたま市

独立行政法人 都市再生機構埼玉地域支社
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 釣上碓遺跡遠景（北西から）



2 釣上碓遺跡第2次調査区全景（南西から）

鈎上碇遺跡の紹介

本遺跡は、埼玉県南東部のさいたま市岩槻区に位置し、綾瀬川沿いに発達した自然堤防と呼ばれる微高地上にあります。調査の結果、平安時代（1,100年前）から中・近世（500～300年前）にわたる集落跡が発見され、今から約300年前の江戸時代の屋敷の一部が見つかりました。また、井戸跡から現在では神社や寺院の手水舎などでしか見ることのできなくなってしまった、曲物に木製の柄を差し込んだ柄杓が出土しました。非常に残りが良く、柄の先端があたる側板の部分には「小猿」と呼ばれるコケシ状の木片が縫いとめられ、側板が保護されていました。

柄杓は、水を汲む用具として昔から人々の暮らしの中で使われてきました。とくに木の信仰に結びついて特別な霊力をもつと信じられていたようで、さまざまな場面において用いられてきたことが、民間伝承に残されています。

序

埼玉県さいたま市の南東部に位置する緑区東部、岩槻区南部地域は、平成13年3月に埼玉高速鉄道線浦和美園駅が開業し、平成14年6月には日韓共同のサッカーワールドカップが埼玉スタジアム2002を主会場のひとつとして開催されました。また、東北自動車道浦和インターのフルインター化をはじめとする道路網の整備も整い、当地域の今後の発展が大いに期待されています。

現在、埼玉県とさいたま市、独立行政法人都市再生機構によって、この地域に快適空間、快適生活を創造する「国際アメニティタウン構想」によるまちづくりが一体となって進められています。国道463号バイパスをはじめとする都市計画道路が整備され、浦和美園駅周辺には高層住宅や大型ショッピングセンターが立ち並び、平成18年4月には「みそのウイングシティ」がまちびらきいたしました。

岩槻南部新和西特定土地地区画整理事業地内には、釣上礎遺跡をはじめとする複数の遺跡が周知されており、その取り扱いについて、関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）の調整により、当事業団が都市基盤整備公団（当時）、岩槻市（当時）、さいたま市の委託を受けて実施いたしました。

釣上礎遺跡は、綾瀬川に沿った自然堤防上につくられた平安時代から中・近世にわたる集落跡です。この調査によって中世から近世にかけて続いた屋敷の一部と考えられる、掘立柱建物跡や井戸跡などの遺構が発見されました。また井戸跡からは、江戸時代のほぼ完形の曲物柄杓が出土し、当時の人々の暮らしぶりを知ることのできる貴重な成果を挙げることができました。

本書はこれらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓蒙および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社、さいたま市、さいたま市教育委員会並びに地元関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成20年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、さいたま市岩槻区大字釣上に所在する釣上碓遺跡第1・2次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は以下のとおりである。

釣上碓遺跡第1次 (KGAGIKR)
埼玉県岩槻市（現さいたま市）大字釣上字碓1873番地他
平成15年10月1日付け 教文第2-54号
釣上碓遺跡第2次 (KGAGIKR2)
埼玉県さいたま市大字釣上字碓1873番地他
平成17年11月29日付け 教生文第2-85号
3. 発掘調査は、岩槻南部新和西特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、岩槻市・都市基盤整備公団埼玉地域支社（平成15年度）、さいたま市・独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社（平成17年度）の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章-3の組織により実施した。調査実施期間及び担当者は以下のとおりである。

平成15年度（第1次）
平成15年9月29日から平成15年11月30日まで
担当者 西井幸雄・渡辺清志
平成17年度（第2次）
平成17年11月28日から平成18年3月10日まで
担当者 昼間孝志・新屋雅明・村端和樹
整理・報告書作成事業は、平成19年10月1日から平成19年12月28日まで、大谷 徹が担当して実施し、平成20年2月29日に本書を印刷・刊行した。
5. 平成15年度の基準点測量は、中央航業株式会社に委託した。また平成17年度の基準点測量は、株式会社シン技術コンサル、空中写真撮影は中央航業株式会社に委託した。
6. 発掘調査時の写真撮影は各担当者が、遺物の写真撮影は大塚道則の協力により、大谷が実施した。
7. 出土品の整理・図版作成は大谷が行い、木製品は大和田 暉の協力を得た。
8. 本書の執筆は、第I章-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、木製品については大和田が、その他は大谷が行った。
9. 本書の編集は大谷が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成20年3月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の方々、機関から御教示、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）

さいたま市教育委員会
青木文彦 越前谷 理 小倉 均 黒済和彦
小林博範 関根俊雄 田代 治 水口由紀子

凡例

1. 遺跡全体における X・Y の数値は、日本測地系（旧測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

E-7グリッド北西杭の座標は、X=-11380.000m、Y=-8620.000m。北緯35°53′50″56653、東経139°44′16″19535である。

E-7グリッドの世界測地系による換算値は、X=-11024.3638m、Y=-8913.1714m。北緯35°54′02″13608、東経139°44′04″53044である。
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を1グリッドとし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせて、例えばE-7グリッド等と呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

SA 柵列 SB 掘立柱建物跡
SD 溝跡 SE 井戸跡
SK 土壌 P ピット（小穴）
5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もある。

全体図 1：500
遺構図 1：60 遺構拡大図 1：40
土器・石製品 1：4
木製品（大型）1：6 （小型）1：4
土製品・金属製品 1：2
6. 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。また黒色処理を施した土師器及び陶磁器の施軸範囲の一部について30%の網かけで示した。
7. 木製品の木取りについては、断面図に年輪方向を模式的に図示した。ただし、年輪の横断面が断面図にあらわれない場合や、木取りを確認していない木製品の断面図は白抜きである。
8. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。
9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - ・口径・器高・底径はcm、重さはgを計測単位とする。
 - ・（ ）内の数値は復元推定値、[]内の数値は残存値である。
 - ・胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A-白色粒子 B-角閃石 C-石英 D-雲母状微粒子 E-長石 F-赤色粒子
G-黒色粒子 H-白色針状物質 I-片岩 J-砂粒 K-小礫
 - ・色調の表記は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）に従った。
 - ・残存は残存率を指し、残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を示した。
10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25000地形図、さいたま市発行1/25000地形図を使用した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(3) 溝跡	22
1. 発掘調査に至る経過	1	(4) 井戸跡	30
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(5) 土塊	41
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4	(6) ビット	50
II 遺跡の立地と環境	5	(7) その他の遺物	62
1. 地理的環境	5	2. 第1次調査B区	63
2. 歴史的環境	6	V 調査のまとめ	64
III 遺跡の概要	9	1. 中・近世の様相	64
IV 遺構と遺物	14	2. ロクロ土師器について	66
1. 第1次調査A区・第2次調査	14	3. 近世の柄杓について	66
(1) 掘立柱建物跡	14		
(2) 柵列	21	写真図版	

挿 図 目 次

第1図	調査区分割図	2	第24図	井戸跡出土木製品(1)	38
第2図	遺跡の位置と埼玉県の地形	5	第25図	井戸跡出土木製品(2)	39
第3図	周辺遺跡分布図	7	第26図	第16号土壌	41
第4図	釣上砦遺跡と周辺の地形	10	第27図	第16号土壌出土遺物	42
第5図	釣上砦遺跡全体図	12・13	第28図	土壌(1)	43
第6図	第1号掘立柱建物跡	14	第29図	土壌(2)	45
第7図	第2号掘立柱建物跡	15	第30図	土壌(3)	46
第8図	第3号掘立柱建物跡	16	第31図	土壌出土遺物	47
第9図	第4号掘立柱建物跡	17	第32図	ピット出土遺物	50
第10図	第5号掘立柱建物跡・出土遺物	18	第33図	ピット全体図区割り図	50
第11図	第6号掘立柱建物跡	19	第34図	ピット全体図(1)	51
第12図	第7号掘立柱建物跡	20	第35図	ピット全体図(2)	52
第13図	第1・2号欄列	21	第36図	ピット全体図(3)	53
第14図	第1号溝跡	22	第37図	ピット全体図(4)	54
第15図	第2～6・9号溝跡	23	第38図	ピット全体図(5)	55
第16図	溝跡出土遺物	25	第39図	ピット全体図(6)	56
第17図	第7・8・10・11・16号溝跡	26・27	第40図	ピット(1)	56
第18図	第12～15・17～20号溝跡	29	第41図	ピット(2)	57
第19図	井戸跡(1)	31	第42図	その他の出土遺物	62
第20図	井戸跡(2)	33	第43図	第1次調査B区全体図	63
第21図	井戸跡出土遺物(1)	34	第44図	中・近世の主な遺構と出土遺物	65
第22図	井戸跡出土遺物(2)	35	第45図	周辺遺跡出土のロクロ土師器	67
第23図	井戸跡出土鉄製品	37	第46図	近世江戸遺跡出土の柄杓	68

表 目 次

第1表	溝跡出土遺物観察表	25	第6表	土壌出土遺物観察表	47
第2表	井戸跡出土遺物観察表	36	第7表	土壌一覧表	49
第3表	井戸跡出土鉄製品観察表	37	第8表	ピット一覧表	58
第4表	井戸跡出土木製品観察表	40	第9表	その他の出土遺物観察表	62
第5表	第16号土壌出土遺物観察表	42	第10表	写真図版遺物番号対応表	70

写真図版目次

巻頭図版 1	1 釣上砦遺跡遠景 (北西から)	3	第3号井戸跡
	2 釣上砦遺跡第2次調査区全景 (南西から)	4	第4号井戸跡
		5	第5号井戸跡
図版 1	1 釣上砦遺跡遠景 (東から)	6	第6号井戸跡
	2 釣上砦遺跡第2次調査区全景 (上空から)	7	第7号井戸跡
		8	第8号井戸跡
図版 2	1 第1次調査A区全景 (北側)	図版10	1 第9号井戸跡
	2 第1次調査A区全景 (南側)	2	第10号井戸跡
図版 3	1 第1次調査B区全景 (南西から)	3	第11号井戸跡
	2 第1次調査B区第1・2号溝跡	4	第12号井戸跡
図版 4	1 第2次調査区全景 (東側)	5	第13号井戸跡
	2 第2次調査区全景 (西側)	6	第14号井戸跡
図版 5	1 第2次調査区全景 (南側)	7	第14号井戸跡土層断面
	2 第2次調査区全景 (北側)	8	第14号井戸跡遺物出土状況
図版 6	1 第2次調査区全景 (西側)	図版11	1 第6号土城
	2 第2次調査区全景 (中央部)	2	第6号土城遺物出土状況
図版 7	1 第1号掘立柱建物跡	3	第8号土城
	2 第2号掘立柱建物跡	4	第9号土城
	3 第3号掘立柱建物跡	5	第10号土城
	4 第4号掘立柱建物跡	6	第11号土城
	5 第5号掘立柱建物跡	7	第13号土城
	6 第5号掘立柱建物跡ピット2遺物出 土状況	8	第14号土城
	7 第6号掘立柱建物跡	図版12	1 第15号土城
	8 第7号掘立柱建物跡	2	第16号土城
図版 8	1 第2～4号溝跡	3	第16号土城遺物出土状況
	2 第7号溝跡 (第1次調査)	4	第17号土城
	3 第7号溝跡	5	第18号土城
	4 第7・10号溝跡	6	第19号土城
	5 第9号溝跡	7	第20号土城
	6 第10号溝跡	8	第21・22号土城
	7 第10号溝跡土層断面 (N-N')	図版13	1 第5号掘立柱建物跡出土遺物 (第10図1)
	8 第15号溝跡	2	第5号井戸跡出土遺物 (第21図7)
図版 9	1 第1号井戸跡	3	第7号井戸跡出土遺物 (第22図17)
	2 第2号井戸跡	4	第16号土城出土遺物 (第27図2)

- 5 第16号土城出土遺物 (第27图3)
6 第6号土城出土遺物 (第31图6)
7 第6号土城出土遺物 (第31图10)
- 图版14 1 磁器碗
2 陶器碗・皿・香炉
3 陶器搥鉢
4 陶器捏鉢
5 陶器甕
6 第11号井戸跡出土陶器甕
7 焙烙
8 かわらけ
- 图版15 1 磁器碗・香炉
2 須惠器瓶・坏
3 第16号土城出土砥石

- 4 砥石
5 金属製品
6 第4号井戸跡出土鉄鎌
7 土製品
8 桃核
- 图版16 1 第14号井戸跡木製品 (第24图5)
2 第7号井戸跡木製品 (第25图9)
3 第5号井戸跡木製品 (第24图1)
4 第7号井戸跡木製品 (第25图10)
5 第7号井戸跡木製品 (第25图16)
6 第7号井戸跡木製品 (第25图15)
7 第7号井戸跡木製品 (第25图22)
8 第9号井戸跡木製品 (第24图3)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

さいたま都市計画事業岩槻南部新和西特定土地画整理事業は、周辺事業と併せて、埼玉高速鉄道線の浦和美園駅、埼玉スタジアム2002を核とした、埼玉の新しい拠点づくりを目指し、UR都市機構、さいたま市、県が協力して進めている事業である。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成9年12月2日付けさ21-14号で、都市基盤整備公団埼玉地域支社長（当時）より教育長あて照会があった。

文化財保護課（当時）では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成14年7月8日付け教文第528号で、鈞上院遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在する。

名称 (No.)	種別	時代	所在地
鈞上院遺跡 (No.77-203)	集落跡	古墳	岩槻市大字鈞上院 1873他

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、工事計画上やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保

護法第57条の3（当時）の規定に基づく発掘通知を埼玉県教育委員会教育長あてに提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、都市基盤整備公団、岩槻市（当時）、文化財保護課、事業団の四者により調査方法、期間等の協議が行われた。

その結果、調査は平成15年9月29日から11月30日、平成17年11月28日から平成18年3月10日の2回に分けて実施された。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は平成15年9月5日付けさ23-30号及び平成17年11月28日付けさ51-158号で、独立行政法人都市再生機構埼玉地域支社長から県教育長あてに提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成15年10月1日付け教文第3-327号及び平成17年11月28日付け教文第3-746号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成15年10月1日付け 教文第2-54号

平成17年11月29日付け 教文第2-85号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

釣上砦遺跡の発掘調査は、さいたま都市計画事業岩槻南部新和西特定土地区画整理事業に先立ち、平成15・17年度の2回にわたって実施した。

遺跡の所在する岩槻区南部地域周辺は、大宮台地鳩ヶ谷支台に沿って流れる綾瀬川が蜿蜒し、左岸には自然堤防を幾つも形成しており、遺跡はその自然堤防上に立地している。標高は約4mで、水田面との比高差は1mに満たない。

後述するように事業地内には、現在5遺跡の所在が確認されている(第4図)。北から尾ヶ崎新田深町遺跡、釣上砦北遺跡、釣上砦遺跡、釣上高岡南遺跡、釣上新田上遺跡の5遺跡である。いずれも市教育委員会による分布調査や県文化財課による範囲確認調査によって遺跡の内容がある程度判明している。

以下、年次ごとに発掘調査の経過について見て行くことにする。

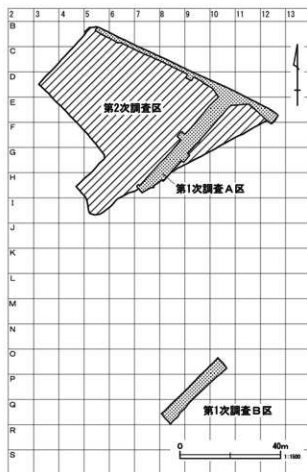
平成15年度

第1次調査は、平成15年9月29日から平成15年11月30日まで実施した。調査区は屋敷地を挟む南北2地点で、北側のT字形の調査区をA区、南側調査区をB区と便宜的に呼称した(第1図)。発掘地点は事業予定地の街路部分に該当し、線的な調査である。なお、調査面積はA区580㎡、B区195㎡の計775㎡である。

9月末までに事務手続きと事務所の設置を終え、10月当初からA区の表土掘削に着手した。重機を使用して遺構確認面まで表土を除去した。発掘調査は遺構確認作業、基準点測量を経て、各遺構の掘り下げ、土層断面図・平面図等の作成、遺構の写真撮影等の調査記録の作成を実施した。

10月下旬、A区の調査を概ね終了し、調査区全体の写真撮影を実施した。その後、遺構測量の確認・補足作業を行い、調査を終了した。

引き続き11月上旬には南側のB区の表土掘削



第1図 調査区分割図

を開始した。B区は、現状では周囲の水田面よりも一段高くなっていたが、土層断面の観察から現地表から約50~70cmが盛土された部分であることが確認された。調査の結果、調査区を横断するように北東から南西に延びる時期不詳の溝跡が3条検出され、B区周辺における遺構の分布が希薄であることが判明した。

11月中旬、遺構の掘り下げが終了し、B区全体の写真撮影を行い、遺構平面図を作成し、調査をほぼ終了した。その後、両調査区の埋戻し作業や事務所の撤収などを行い、11月末に調査をすべて完了した。

なお、第1次調査で検出された遺構数は、A区が中・近世の溝跡6条、井戸跡2基、土城7基、柵列1条、ピット42基、B区が時期不詳の溝跡3

条である。

出土遺物の総量は、両調査区合せて陶磁器、土器、石製品などコンテナ2箱である。

平成17年度

第2次調査は、平成17年11月28日から平成18年3月10日まで実施した。調査地点は、前回調査を実施したA区を包括する事業地部分の調査で、調査面積は3,333㎡である。

11月末までに事務手続きと事務所設置を終え、12月当初から重機を用いて表土掘削に着手した。表土掘削に併行して、人力による遺構確認作業を開始し、中旬から遺構の精査を本格的に実施した。発掘調査は遺構確認作業、基準点測量を経て、各遺構の掘り下げ、土層断面図・平面図等の作成、遺構の写真撮影等の調査記録の作成を実施した。

平成18年1月上旬までに、遺構の調査をほぼ終了し、1月25日に調査区の空中写真撮影を実施した。その後、遺構平面図の確認・補足作業を行い、1月下旬には遺構の調査を終了した。その後、調査区を埋め戻し、事務所の撤去及び事務手続きを行い、3月上旬までに本事業に伴うすべての調査を完了した。

なお、第2次調査で検出された遺構数は、掘立柱建物跡7棟、柵列1条、溝跡14条、井戸跡12基、土城17基、ピット370基である。ただし、このうち2条の溝跡(SD3・7)は、調査区の制約により2回にわたって調査を行った。

出土遺物の総量は、土器、陶磁器、木製品などコンテナ6箱である。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成19年10月1日から同年12月28日までの3ヶ月間にわたって実施した。

遺物の水洗・註記作業を行った後、接合・復元作業を実施した。接合の終了した遺構から順次、遺物実測を開始した。陶磁器や木製品などを中心に機械実測(3スペース)を利用して素図を作成し、この素図をもとに実測図を完成させた。実測図は製図ペンで墨入れ(トレース)し、必要に応じて拓影を採った。実測図と拓影図を組み合わせでレイアウトを行い、遺物図版の版下を作成した。

遺構図版は図面整理と修正を経て第二原図を作成した。第二原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ後、グラフィックソフトでデジタルトレース・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

実測遺物はその属性をパソコンに入力し、データ処理・編集して遺物観察表を作成した。また、遺存度の高い遺物を中心に石膏による復元作業を行い、一部写真撮影を実施した。併行して調査時に撮影した写真を選択し、焼付け、トリミング指示などを行い、写真図版を作成した。

作成したデータを基に原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真などを組み合わせて割付を作成した。写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め、編集作業に着手した。12月中旬に大部分の作業を完了させ、下旬に印刷業者を選定し入稿した。校正は3回行い、平成20年2月末に報告書を刊行した。

図面類・写真類・遺物は整理分類して、収納作業を実施した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成15年度（発掘調査）

理 事 長	桐 川 卓 雄	調 査 部	
常務理事兼管理部長	中 村 英 樹	調 査 部 長	宮 崎 朝 雄
管理部		副 部 長	坂 野 和 信
副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員（調査第一担当）	昼 間 孝 志
主 席	田 中 由 夫	統 括 調 査 員	西 井 幸 雄
		主 任 調 査 員	渡 辺 清 志

平成17年度（発掘調査）

理 事 長	福 田 陽 充	調 査 部	
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調 査 部 長	今 泉 泰 之
管理部		副 部 長	坂 野 和 信
副 部 長	村 田 健 二	主 席 調 査 員（調査第一担当）	昼 間 孝 志
主 席	高 橋 義 和	統 括 調 査 員	新 屋 雅 明
		調 査 員	村 端 和 樹

平成19年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調 査 部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調 査 部 長	村 田 健 二
総務部		調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	整 理 第 二 課 長	富 田 和 夫
総 務 課 長	松 盛 孝	主 査	大 谷 徹

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

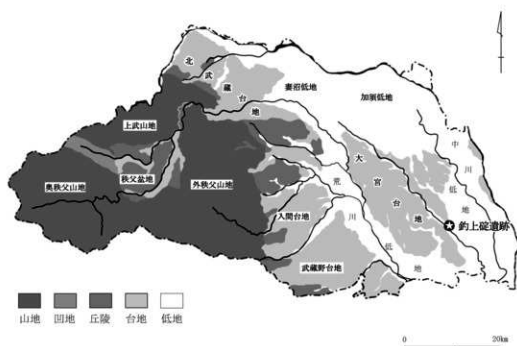
釣上砦遺跡は、埼玉県の南東部、さいたま市岩槻区大字釣上に所在する。岩槻区は平成17年4月1日、旧岩槻市がさいたま市と合併し、10番目の新しい区としてスタートした。遺跡は旧岩槻市南部の綾瀬川と元荒川に挟まれた沖積低地に位置している。中川低地の東縁部にあたり、南流する綾瀬川の左岸に発達した自然堤防上に立地する。大きく蛇行する綾瀬川の左岸には幾つもの自然堤防が発達し、幅数10～数100mにまで及んでいる。これに対して右岸には大宮台地鳩ヶ谷支台が迫り、自然堤防の形成はあまり顕著でない。台地部との比高差は6～10mで、台地部側からは綾瀬川流域の低地を一望することができる。

これまで自然堤防における遺跡の分布は皆無で、中世寺院や城館跡、板碑等の所在から中世以降、本格的な土地利用が開始されたと考えられてきた。しかし、近年の低地部における発掘調査例の増加によって、弥生時代以降、低地部の開発が広範に

行なわれていたことが明らかにされつつある。当該地域でも綾瀬川左岸の自然堤防上に現在13遺跡の所在が確認され、自然堤防が古くから人々の生活の舞台となっていたことが知られる。

古代には利根川本流が古閑田川筋から元荒川筋へ流下し、武蔵国埼玉郡と下総国葛飾郡との境界を成していた。同様に綾瀬川筋は旧荒川の流路とされ、足立郡との境になっていた。

ところで「新編武蔵風土記稿」「郡村誌」などには鉤上とあるが、古文書では鉤上・釣上・釣上が混用され、現在では大字名として釣上が用いられている。近世には埼玉郡岩槻領釣上村と呼ばれ、古くは騎西荘越谷郷に属していた。村の中央部を日光御成街道下道が通り、明治12年には南埼玉郡に、同22年には8カ村が合併して新和村が成立した。村名は新しく和をもって始めようとの意である。以後、昭和29年5月岩槻町、同年7月岩槻市、平成17年さいたま市岩槻区へと変遷した。



第2図 遺跡の位置と埼玉県の地形

2. 歴史的環境

釣上院遺跡の所在する綾瀬川流域の自然堤防上の諸遺跡については次章で触れることとし、ここでは大宮台地の遺跡を俯瞰的に概観する。

旧石器時代の遺跡は、岩槻支台では真福寺貝塚や黒谷田端前遺跡などで細石器やナイフ形石器が出土しているだけで現状では良好な資料に恵まれていない。一方、芝川に面する鳩ヶ谷支台及び浦和支台の台地縁辺部を中心に数多くの遺跡が確認されている。鳩ヶ谷支台では北半部に上野田西台遺跡、えんぎ山遺跡、鶴巻遺跡、東栗遺跡、南半部に以原遺跡、ト伝遺跡、木曾呂表遺跡などが分布している。浦和支台では大古里遺跡、明花向遺跡、和田北遺跡、北宿西遺跡、松木遺跡、井沼方遺跡など多くの遺跡が調査され、AT 降灰期以前の遺跡も確認されている。

縄文時代に入ると大宮台地上に数多くの遺跡が分布する。草創期の遺跡は岩槻支台ではまだ確認されていないが、鳩ヶ谷支台のえんぎ山遺跡では隆起線文・爪形文・多縄文系土器などが出土し、該期の基準資料を提供している。

早期に入ると、遺跡の規模や数が飛躍的に増加する。浦和支台の大古里遺跡はその代表的な遺跡である。捺糸文・沈線文・条痕文系土器をはじめ100基を超えるが穴群と2軒の住居跡が調査されている。また北宿西遺跡や明花向遺跡ではスタンブ状石器と呼ばれる食物加工用石器が出土している。この他に浦和支台では松木遺跡、井沼方遺跡、梅所遺跡、芝原遺跡、和田北遺跡、鳩ヶ谷支台では東裏西遺跡などが知られている。

早期の末頃から気候の温暖化が徐々に進んでいく。そして前期には海進がピークを迎え、大宮台地の縁辺部から開析谷周辺にかけて数多くの貝塚や集落が形成されるようになる。

この時期の貝塚では岩槻支台に学史的にも著名な黒谷貝塚をはじめ、浮谷貝塚、飯塚貝塚、飯塚南貝塚、訊山貝塚などが分布しているほか、芝川左岸の大和田片柳支台の八雲貝塚、原山貝塚、同右岸浦和支台内陸部の太田窪貝塚などがある。集落跡には浦和支台の井沼方遺跡、会ノ谷遺跡、松木遺跡、大古里遺跡、北宿遺跡などが挙げられる。

周辺遺跡

1 釣上院遺跡	27 黒谷貝塚	53 三宅遺跡	79 東中尾遺跡	105 大門貝塚
2 釣上院北遺跡	28 高曾根上曾根遺跡	54 南宿北遺跡	80 大北遺跡	106 東栗遺跡
3 釣上新田上遺跡	29 高曾根内出遺跡	55 松ノ木遺跡	81 宮前遺跡	107 東栗西遺跡
4 尾ヶ崎新田深町遺跡	30 高曾根中曾根遺跡	56 松木遺跡	82 井沼方馬塚遺跡	108 えんぎ山遺跡
5 釣上高岡南遺跡	31 高曾根東前遺跡	57 芝原遺跡	83 井沼方遺跡	109 鶴巻遺跡
6 釣上内谷遺跡	32 木田外野遺跡	58 水深北遺跡	84 井沼方南遺跡	110 南方遺跡
7 釣上高岡遺跡	33 野島氏館	59 水深南遺跡	85 川口市 No. 136 遺跡	111 川口市 No. 5 遺跡
8 霞久保新田井戸田遺跡	34 越谷市 No. 9 遺跡	60 梅所遺跡	86 明花東遺跡	112 精進場遺跡
9 霞久保新田のり遺跡	35 大道遺跡	61 梨形遺跡	87 明花南遺跡	113 上台遺跡群
10 横根池組遺跡	36 大道第2遺跡	62 梨形北遺跡	88 明花向遺跡	114 戸原上台遺跡
11 横根上組遺跡	37 さいたま市 A-178 遺跡	63 駒前遺跡	89 明花上ノ台遺跡	115 野広場遺跡
12 谷下新守前遺跡	38 八雲貝塚	64 不動北遺跡	90 前南遺跡	116 川口市 No. 102 遺跡
13 谷下新守原遺跡	39 原山貝塚	65 原山坊ノ家遺跡	91 小松原高校遺跡	117 四本竹遺跡
14 相倉中島遺跡	40 上ノ宮遺跡	66 不動谷南遺跡	92 太田窪貝塚	118 川口市 No. 119 遺跡
15 柏崎中組遺跡	41 上野田様子遺跡	67 駒形南遺跡	93 門正寺遺跡	119 木曾呂表遺跡
16 柏崎遺跡	42 さいたま市 A-116 遺跡	68 中尾中丸遺跡	94 飯塚遺跡	120 臥原遺跡
17 真福寺貝塚	43 さいたま市 A-3 遺跡	69 大間木内谷遺跡	95 獅子八幡神社遺跡	121 八木本遺跡
18 木曾呂貝塚	44 篠山遺跡	70 会ノ谷遺跡	96 さいたま市 A-20 遺跡	122 川口市 No. 128 遺跡
19 飯塚原遺跡	45 大古里遺跡	71 梅所南遺跡	97 さいたま市 A-21 遺跡	123 川口市 No. 129 遺跡
20 飯塚北貝塚	46 北宿遺跡	72 和田北遺跡	98 上野田西台遺跡	124 ト伝遺跡
21 飯塚貝塚	47 北宿西遺跡	73 和田西遺跡	99 中里遺跡	125 石神貝塚
22 南下新井番場北遺跡	48 北宿南遺跡	74 和田南遺跡	100 谷ノ前遺跡	126 上ノ岸遺跡
23 飯塚南貝塚	49 馬場北遺跡	75 西谷遺跡	101 中野田中原遺跡	127 新井宿下1-1 寺遺跡
24 浮谷貝塚	50 馬場東遺跡	76 吉場遺跡	102 龜谷遺跡	128 猿貝貝塚
25 訊山貝塚	51 馬場小山遺跡	77 吹ヶヶ戸稲荷橋遺跡	103 下野田本村遺跡	129 猿貝貝塚
26 黒谷田端前遺跡	52 松木北遺跡	78 とうのこし遺跡	104 下野田稲荷橋遺跡	



第3図 周辺遺跡分布図

前期の中頃以降は気候の寒冷化により、海の状態が変化したため遺跡の規模・数ともに減少する。中期後半から後期において特筆すべき遺跡として浦和支台の馬場小室山遺跡がある。過去30数回に及ぶ調査において縄文時代中期から晩期を中心とした大規模な集落跡であることが明らかにされている。この他に原山坊ノ在家遺跡や駒形北遺跡、会ノ谷遺跡なども同時期の遺跡である。

概して後期から晩期にかけての遺跡は減少傾向にあるが、大宮台地南部では先述の馬場小室山遺跡をはじめ、岩槻支台の真福寺貝塚、黒谷田端前遺跡など著名なものが多い。馬場小室山遺跡では県指定文化財の面画土器や土偶装飾土器などの優品をはじめ、土偶、土版、独鈷石などさまざまな信仰遺物が出土している。また鳩ヶ谷支台南半部の猿貝貝塚は晩期安行式土器の標準資料を出土した遺跡としてつとに知られる。

その後、弥生時代前期までの遺跡の所在は周辺地域と同じく確認されていない。中期に入ると台地縁辺部を中心に集落が再び形成され様相が一変する。鳩ヶ谷支台北部の上野田西台遺跡では16軒の住居跡が調査され、挟入磨製石斧や鉄製鉋が出土している。また芝川右岸浦和支台の明花向遺跡では方形周溝墓や集落を囲む環濠が検出された。一方、釣上砦遺跡周辺では笹久保新田の自然堤防上の遺跡から底部に穿孔した壺が出土しており、方形周溝墓の存在が想定されている。この時期に生活の舞台が台地上から低台地や自然堤防にまで広がっていったことが容易に察せられる。

後期になると遺跡の数は増加し、中期に引き続いて台地縁辺部を中心に分布する。鳩ヶ谷支台では下野田稲荷原遺跡、下野田本村遺跡、東裏西遺跡、上野田西台遺跡、谷ノ前遺跡などがある。また芝川右岸の浦和支台東縁辺部には県内でも最大規模の環濠集落である井沼方遺跡が所在する。これまでに10数次に及ぶ発掘調査が実施され、環濠集落と方形周溝墓群が検出されている。方形周溝

墓の中には主体部から鉄剣やガラス玉を出土したものがあり、有力者の存在を暗示する。この他にも大規模な環濠集落の馬場北遺跡、北宿遺跡、芝原遺跡、宮前遺跡、梅所南遺跡など数多く分布し、拠点集落を核とした地域社会が形成されていることを雄弁に物語っている。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては継続する遺跡が多く認められるが、古墳時代前期以降には遺跡数が大幅に減少し、集落や古墳の多くは大宮台地西部の荒川低地側に大きく移動し、集落の再編が図られたようである。

奈良・平安時代には、再び台地上に集落が営まれる。概して小規模なものが多く、代表的な遺跡として鳩ヶ谷支台の下野田稲荷原遺跡、下野田本村遺跡、東裏遺跡などが挙げられる。このうち下野田稲荷原遺跡では平安時代の竪穴住居跡から須恵器に伴ってロクロ土器の坏・埴などの供膳器の出土が目立つ。周辺では浦和支台の和田北遺跡や大和田片柳支台の東北原遺跡、御蔵野山中遺跡などでロクロ土器を生産したと考えられる土器焼成域が検出されている。その成立については下総地域などの強い影響を読み取ることができ、大宮台地の地理的特性を示す事象といえよう。

この他に該期の遺跡として浦和支台の大間木内谷遺跡、駒形遺跡、駒前遺跡、北宿遺跡、宮前遺跡、松木遺跡など数多くの遺跡が分布する。

一方、台地上の遺跡のみならず、元荒川流域の自然堤防上にも右岸には末田外野遺跡、高曾根中曾根遺跡、左岸には大道遺跡、大道第2遺跡などが出現する。このうち大道遺跡では平安時代の竪穴住居跡6軒、土器焼成域と考えられる2基の土壌が調査されている。釣上砦遺跡をはじめとする自然堤防上への集落の展開は、古閑田川流域の遺跡分布とあわせて、付近の自然堤防が形成・安定化したことを示す。こうした遺跡分布の動態から河川流路の変遷過程の復元が試みられている。(埼葛地区文化財担当者会2007)。

Ⅲ 遺跡の概要

釣上礎遺跡は、埼玉高速鉄道線浦和美園駅の東約1kmに位置し、国道463号バイパスと県道蒲生・岩槻線が交差する釣上交差点の北西約400mに所在している。大宮台地嶋ヶ谷支台に沿って南流する綾瀬川左岸の沖積平野に発達した自然堤防上に立地し、標高4m前後の自然堤防と低地が複雑に入り組んだ地勢を示している。現況でも水田面に部分的に高低差が見られ、島状に取り残された微高地なども多く、現地形から旧地形を推定することは難しい。おそらく自然堤防を分断するように旧河道が複雑に蛇行しているのであろう。

現地に立つと綾瀬川のほとりに広がる水田地帯に屋敷地が点在するのどかな田園風景を残す一方で、埼玉スタジアム2002や浦和美園駅を中心に急速な都市化の波が押し寄せ、大きく変貌をとげつつある。

釣上礎遺跡は、平成13・14年度に文化財保護課（当時）によって実施された範囲確認調査で、方形周溝墓と考えられる溝跡や古墳時代前期の土師器が検出されたことにより埋蔵文化財包蔵地（旧岩槻市 No.77-203）として登録された経緯がある。遺跡の分布範囲は東西約120m、南北約150mで、中心部分は宅地部分となり、周辺には水田が広がり、島状の微高地を形成している。

発掘調査は、平成15・17年度の2回にわたって実施した（第1・5図）。工事施工の関係で、第1次調査A区と第2次調査区は隣接地点を2回に分けて調査を実施しているが、ここでは両者をまとめて報告する（第IV章-1）。また第1次調査B区（大字釣上字礎1902番地2他）は別地点としてその概要を報告する（第IV章-2）。

第1次調査A区・第2次調査において検出された遺構は、平安時代の溝跡2条、土壇1基、中・近世の掘立柱建物跡7棟、柵列2条、溝跡18条、井戸跡14基、土壇23基、ピット412基である。ま

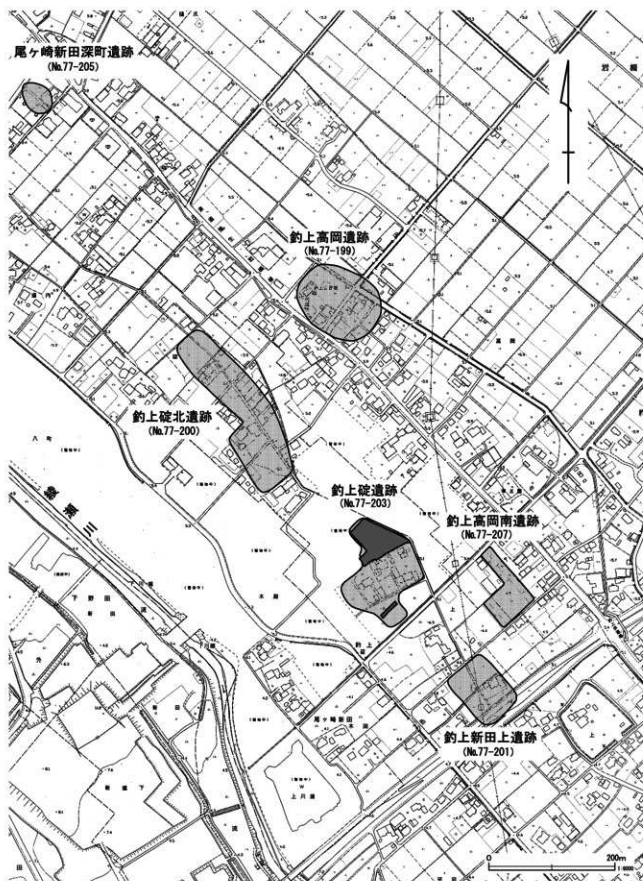
た、第1次調査B区では時期不詳の溝跡3条を検出した。

以下、各調査地点の概要について説明する。

第1次調査A区・第2次調査区で検出された平安時代の遺構は、第1・7号溝跡の2条と第16号土壇である。第1号溝跡は調査区東部を南西から北東に向かって走行し、ロクロ土師器環と須恵器環の底部を円板状に再加工したものが出土していることから該期に位置づけられる。また第7号溝跡は調査区縁辺を地形に沿って走行していることから集落域の外縁を区画する溝と考えられる。第16号土壇は長軸長1.72mの楕円形を呈する土壇で、壁際に3個体のロクロ土師器の環・埴類がまとめられ、底面中央部から砥石1点が出土した。土壇の平面形や遺物の出土状態から土壇墓の可能性が高い。出土したロクロ土師器の特徴から9世紀末葉から10世紀初頭に位置づけられる。

中・近世の遺構は、掘立柱建物跡7棟、柵列2条、溝跡18条、井戸跡14基などで構成された屋敷地の一部と考えられる。

掘立柱建物跡は、第10号溝跡や鍵の手状に屈曲する第8号溝跡によって区画された範囲に所在する。その分布のあり方は中央部から北西部にかけて展開する第1～3号掘立柱建物跡の3棟からなる一群と、中央部から東側にかけて展開する第4～7号掘立柱建物跡の4棟からなる一群に大きく二分される。3間×2間が3棟、2間×2間が4棟検出され、束柱をもつものが多い。3間×2間の掘立柱建物跡は北西から南東方向に主軸を採り、いずれも高所に構築されている。このうち第5号掘立柱建物跡の柱穴からは陶器捏鉢の破片が出土した。なお、掘立柱建物跡については出土物がほとんどないため年代の決め手を欠くが、周囲に位置する井戸跡の出土物などを勘案すると、近世段階の所産と想定される。しかし、一部は中世



第4図 釣上破遺跡と周辺の地形

にまで遡る可能性を残している。

井戸跡は掘立柱建物跡との配置関係から建物の傍に構築されているようである。このうち第7号井戸跡には多量の建築材が廃棄されていた。また第14号井戸跡では井戸側に利用された結桶の箍（タガ）の一部が検出された。これは江戸遺跡などで検出されている、底を抜いた結桶を入れ子状に数段重ねた構造の井戸側が存在した可能性を示している。遺物では、第5号井戸跡から出土した曲物柄杓が目目される。

今回の調査では平安時代から中・近世におよぶ遺構・遺物が検出され、予想以上の成果を挙げることができた。ただし、従前の調査で指摘されていた古墳時代前期の遺構については、土師器の小型高環の破片が近世の溝跡から出土しただけで、明確にすることはできなかった。しかし、遺跡形成の端緒は古墳時代前期にまで遡ることは間違いないであろう。

第1次調査B区は遺跡範囲の南端に位置し、街路予定地の調査である。調査範囲は部分的で、調査区を横断するように平行に延びる3条の溝跡が検出されたにすぎない。

次に、事業地内における遺跡を中心に周辺の遺跡群の様相について概観したい。

現在、事業地内には分布調査や範囲確認調査によって5遺跡の所在が確認されている。北から尾ヶ崎新田深町遺跡（No.77-205）、釣上碓北遺跡（No.77-200）、釣上碓遺跡（No.77-203）、釣上高岡南遺跡（No.77-207）、釣上新田上遺跡（No.77-201）である。さらに事業地外の自然堤防東側縁辺部には釣上高岡遺跡（No.77-199）が確認されている（第4図）。

尾ヶ崎新田深町遺跡は事業地内の北端に位置する。自然堤防の縁辺部に立地し、遺跡範囲は長軸約60m、短軸約40mの略楕円形である。試掘調査によって古墳時代前期の住居跡1軒が検出され、壺・甕・小型器台等の古式土師器が出土した。

釣上碓北遺跡は、釣上碓遺跡の北側約200mに隣接する。遺跡範囲は南北約330m、東西約90mの広範囲に分布する。縄文土器（後期）、土師器（弥生～古墳）、かわらけ等が表採されている。

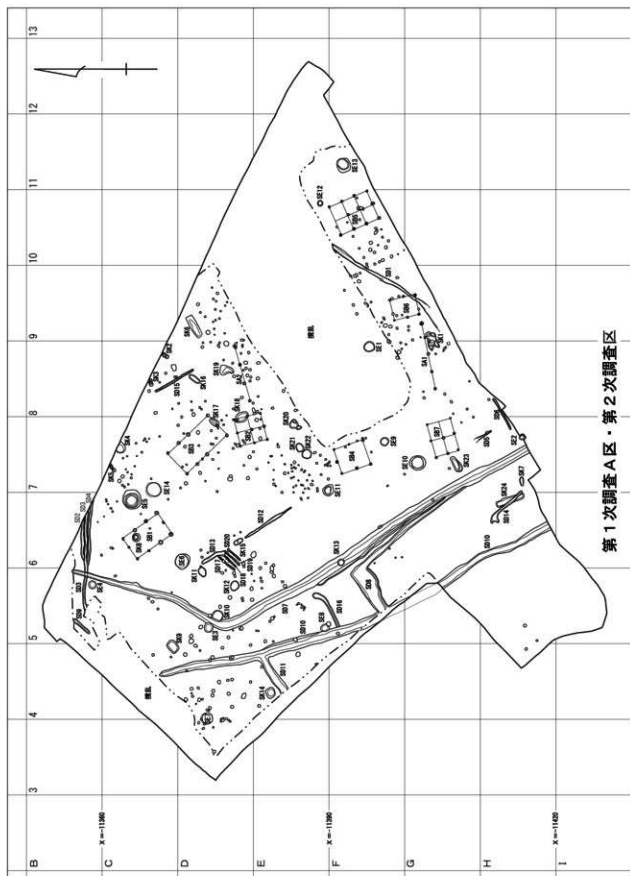
釣上高岡南遺跡は、釣上碓遺跡の南東側に隣接する。遺跡範囲は南北約120m、東西約80mである。同じく範囲確認調査によって土壇・溝跡等が検出され、土師器・須恵器等が出土した。

釣上新田上遺跡は、釣上碓遺跡の南側約250mに隣接する。遺跡範囲は南北約110m、東西約70mで、南側の一部は国道463号バイパス建設に先立ち範囲確認調査が行なわれている。縄文土器、土師器、かわらけ等が表採されているほか、平成15年度に実施された範囲確認調査では古墳時代前期の住居跡が検出された。

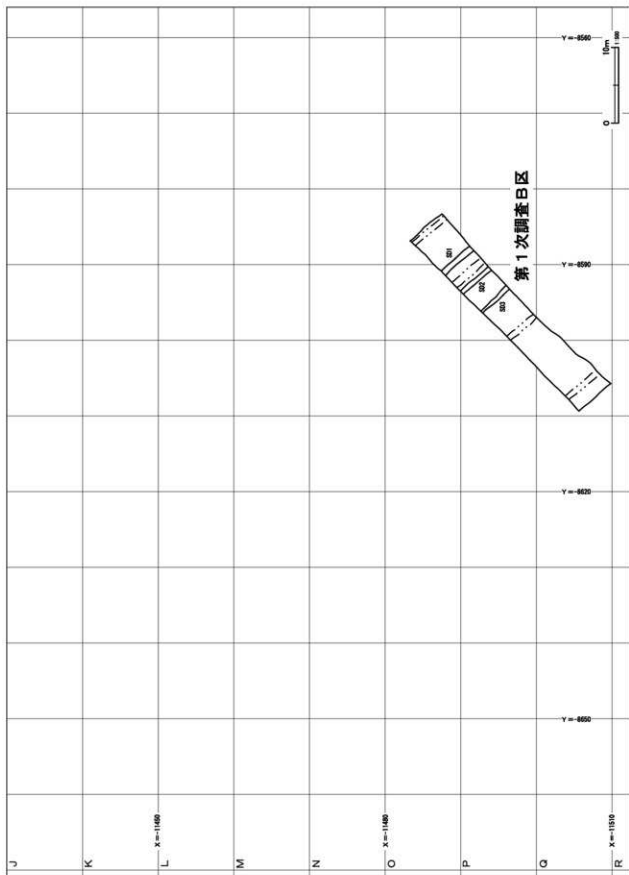
釣上高岡遺跡は、釣上碓北遺跡の北東側約250mに所在し、新義真言宗の円福寺境内を中心に分布する。弥生・古墳時代前期の集落跡である。

このように釣上碓遺跡の所在する自然堤防には古墳時代前期以降に形成された数多くの遺跡が分布しており、綾瀬川流域の開発が古墳時代前期以降に本格化したことが窺われる。該期には鳩ヶ谷支台にも下野田稲荷原遺跡、下野田本村遺跡、東裏遺跡等の遺跡が数多く分布し、中には東裏遺跡のように方形周溝墓を伴う遺跡も出現する。今後は、低地部の遺跡群と台地上の遺跡群の関連性を遺跡群の動態の中に位置づけていくことが大きな課題である。

また、綾瀬川左岸の自然堤防上には弘長三（1263）年を初見に13世紀後半から板碑の分布が見られ、鎌倉時代以降において積極的な土地利用がなされている。釣上碓遺跡で検出された屋敷跡もこうした地域史の中に位置づけていくことが必要である。同様に、近世には代官頭伊奈忠次によって綾瀬川流域の低湿地開発を目的に備前堤が開墾され、江戸初期から新田開発が盛んに行なわれたことが大きな影響を与えているのであろう。



第5図 釣上砦遺跡全体図



Ⅳ 遺構と遺物

1. 第1次調査A区・第2次調査

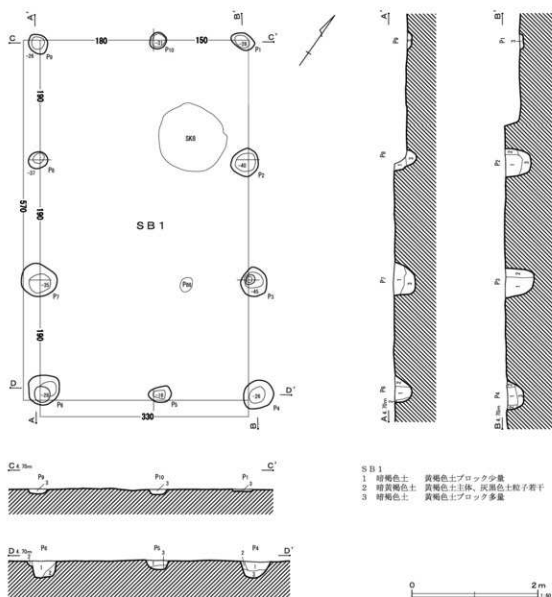
(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第6図)

第1号掘立柱建物跡は、調査区北西部のC-6グリッドに位置する。北西側は水田の土取りのため確認面が一段下がっていた。また、土取り範囲との境界に第8号土壌が重複しているが、新旧関係については不明である。周囲には東側に第5・

14号井戸跡、南西側に第6号井戸跡が隣接する。

桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行寸法は5.70m、梁行寸法は3.30m、主軸方位はN-36°-Wを指す。桁行の柱間寸法は1.90m等間に揃う。一方、梁行の柱間寸法はP1-P10間が1.50m、P9-P10間が1.80mと不揃いで、南東



第6図 第1号掘立柱建物跡

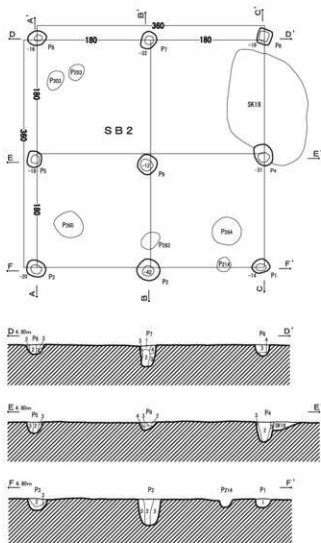
側梁行も同様である。

柱穴は直径26～59cmの円形で、比較的小規模である。深さも16～45cmと全体的に浅い。柱痕は第2層の暗褐色土を想定することができる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第2号掘立柱建物跡 (第7図)

第2号掘立柱建物跡は、調査区中央部北寄りのD・E-7グリッドを中心に、一部D・E-8グリッドにかかると。東側柱筋に第18号土壌が重複し、それを切っていた。北側には第3号掘立柱建物跡が近接する。東柱(P9)をもつ2間×2間の側柱建物跡と考えられる。桁行寸法、梁行寸法ともに3.60mで、各柱間寸法は1.80m等間に揃う。



第7図 第2号掘立柱建物跡

主軸方位はN-13°-Wを指す。

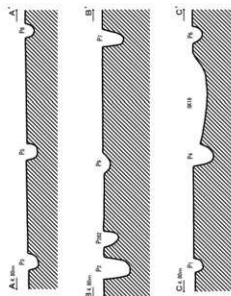
柱穴は小規模で、直径22～35cmの円形を基調とする。深さは12～42cmと浅いものが多い。P9は中心をはずれることから東柱でない可能性もある。土層断面は第2層が柱痕、第3・4層が掘方埋土に相当する。

出土遺物がないため、時期は不明である。

第3号掘立柱建物跡 (第8図)

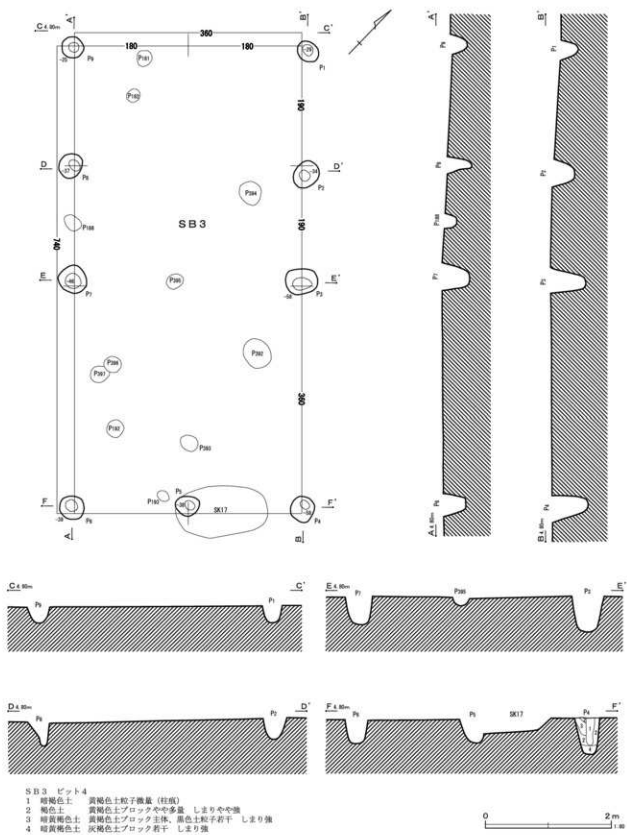
第3号掘立柱建物跡は、調査区中央部北寄りのD-7グリッドを中心位置し、北端部がC-7、D-8グリッドにかかると。南東側梁行に第17号土壌が重複するが、新旧関係は不明である。

桁行3間、梁行2間の側柱建物跡である。桁行



- SB 2
- 1 黄褐色土 黄褐色土ブロック多数
 - 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック微量 (柱痕)
 - 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量 しまり揃
 - 4 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体、黒色土粒子若干 しまり揃





第8図 第3号掘立柱建物跡

寸法は7.40m、梁行寸法は3.60m、主軸方位はN-45°-Wを指す。今回検出された建物跡の中では最も規模が大きい。

桁行はやや変則的で、P1-P3間の柱間寸法は1.90m等間に揃えているが、P3-P4間は3.60mと柱間寸法が長い。梁行は北西側は柱間柱を欠いているもの、南東側の柱間寸法は1.80m等間に揃える。

柱穴は円形を基調とし、直径32~49cm、深さ25~58cmを測り、他の建物跡と比較すれば一回り大きな掘方となる。P4の土層断面は第1層が柱痕、第2~4層が掘方埋土に該当する。

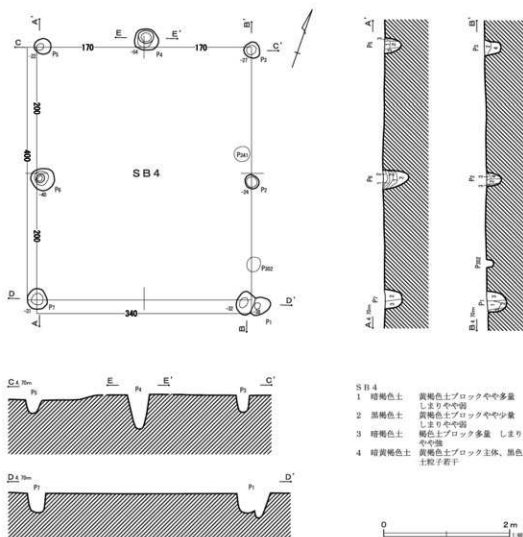
遺物はまったく出土していない。時期については不明である。

第4号掘立柱建物跡 (第9図)

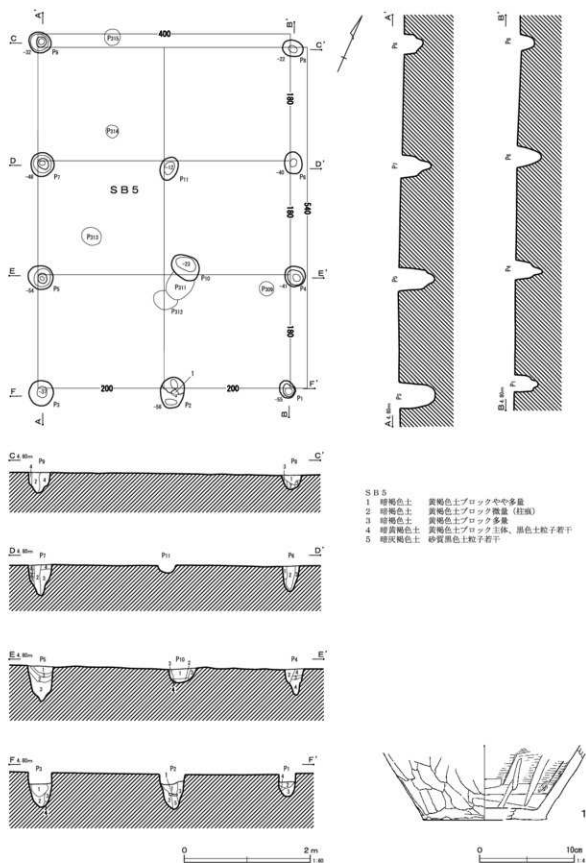
第4号掘立柱建物跡は、調査区中央部のF-7グリッドに位置する。北西側に第11号井戸跡、南東側に第9号井戸跡が近接する。

2間×2間の側柱建物跡である。桁行寸法は4.00m、梁行寸法は3.40m、主軸方位はN-20°-Wを指す。桁行の柱間寸法は2.00m等間となる。梁行は南側の柱間柱を欠くが、北側の柱間寸法は1.70m等間に揃う。柱穴は円形を基調とし、直径20~54cm、深さ22~54cmである。ピットの土層は明確でないが、第2層が柱痕に相当しようか。

遺物はまったく出土していない。時期については不明である。



第9図 第4号掘立柱建物跡



第10図 第5号掘立柱建物跡・出土遺物

第5号掘立柱建物跡 (第10図)

第5号掘立柱建物跡は、調査区東端部のF-10グリッドに位置する。北側に第12号井戸跡、東側に第13号井戸跡が近接する。桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、P10・11は東柱の可能性がある。桁行寸法は5.40m、梁行寸法は4.00m、主軸方位はN-22°-Wを指す。桁行の柱間寸法は1.80m等間に揃う。一方、梁行は北側の柱間柱を欠いているが、南側は柱間寸法2.00m等間である。

柱穴は円形を基調とし、直径23~47cm、深さ22~56cmである。当りの部分が小穴状となるものもある。土層断面は明確でないが、第2層は柱痕、第3・4層は掘方埋土に相当しよう。

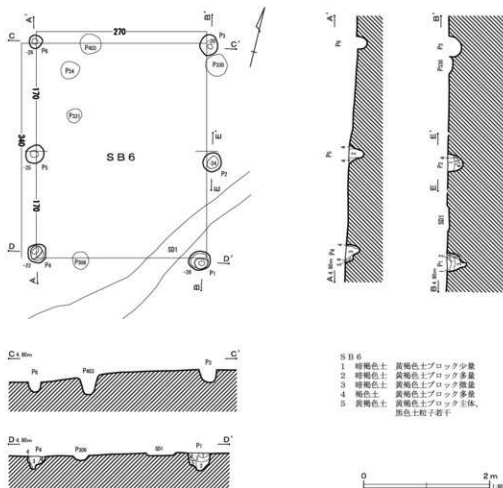
遺物は、P2の埋土中層から陶器捏鉢の底部片が出土した(第10図1)。体部外面はやや粗いナ

デを施し、底面に砂粒の圧痕を残す。内面は体部に横方向の木口状工具によるナデを施し、部分的に縦位のナデを加える。時期は明確でないが、近世の所産であろう。

第6号掘立柱建物跡 (第11図)

第6号掘立柱建物跡は、調査区東部南寄りのF・G-9グリッドに位置する。調査区の制約により第1次調査と第2次調査の2回にわたって調査を実施した。南東隅部を第1号溝跡が斜めに横切っているが、新旧関係については不明である。なお、南側梁行の柱筋に軸を揃えて第1号柵列が伸びている。

桁行2間、梁行1間の側柱建物跡である。桁行寸法は3.40m、梁行寸法は2.70m、主軸方位はN-12°-Wを指す。桁行の柱間寸法は1.70m等



第11図 第6号掘立柱建物跡

間であるが、やや芯々をはずれる。

柱穴は円形を基調とし、直径21～34cm、深さ20～28cmと全体に小規模である。ピットの土層断面では明確でないが、第2・3層が柱痕に相当するようである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

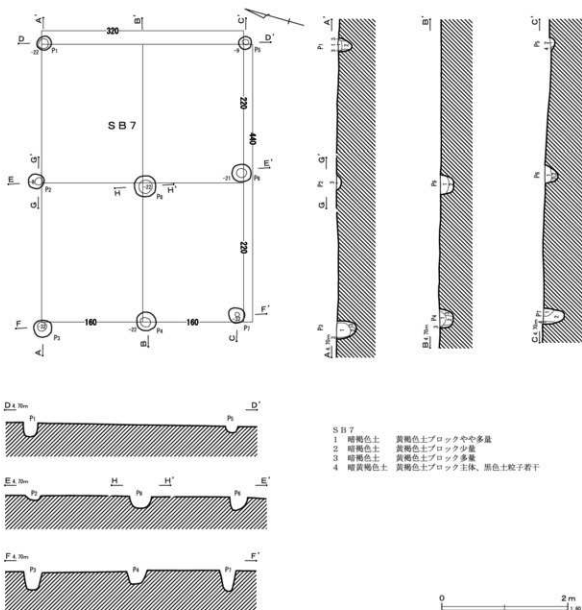
第7号掘立柱建物跡 (第12図)

第7号掘立柱建物跡は、調査区中央部南寄りのG-7グリッドに位置する。北側に第10号井戸跡、西側に第23号土壌が近接する。

東柱 (P8) をもつ2間×2間の側柱建物跡である。桁行寸法は4.40m、梁行寸法は3.20m、主軸方位はN-74°-Eを指す東西棟である。

桁行の柱間寸法はおおよそ2.20m等間となるが、やや芯々をはずれる。梁行は西側の柱間柱を欠き、東側の柱間寸法は1.60m等間で、桁行に比べ短くなっている。

柱穴は円形を基調とし、直径20～35cm、深さ9～32cmと全体に小規模で、深度も浅い。遺物が出土していないため、時期は不明である。



第12図 第7号掘立柱建物跡

(2) 柵 列

柵列は2条を検出した。掘立柱建物跡に伴うように配置されており、板扉の支柱として屋敷地を区画し、遮蔽するような機能をもっていたものと想定される。

第1号柵列 (第13図)

第1号柵列は、調査区南東部のG-8・9グリッドに位置し、第1次調査において検出された。

5本の柱穴が東西方向に直線状に並び、東側延長線上には第6号掘立柱建物跡が位置する。建物跡の南側柱筋がその線上に乗っている。全長8,8mで、主軸方位はN-77°-Eを指す。

柱穴は円形を基調とし、直径28~50cm、深さ28~40cmを測る。柱間寸法はP1-P4間は2,30m等間であるが、P4とP5の間隔はやや短くなり、1,9mを測る。土層断面の観察ではP1とP3に柱痕が確認された。なお、P5は他のビットに比

べ一回り大きく二段に掘り込まれていた。

出土遺物がなく、時期は不明である。

第2号柵列 (第13図)

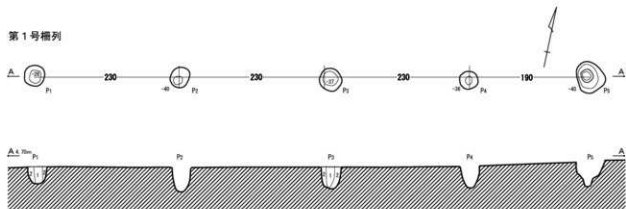
第2号柵列は、調査区中央部北寄りのD-8グリッドに位置しており、第2次調査において検出された。

4本の柱穴によって構成され、おおよそ東西方向に直線状に並び、全長7,30m、主軸方位はN-76°-Eを指す。P2のみが僅かに北側へずれる。第2号掘立柱建物跡の東側に位置し、建物との間隔は約1,8mを測る。

柱穴は円形を基調とし、直径29~37cm、深さ31~37cmである。柱間寸法はP1-P2間が2,4m、P2-P3間が2,5m、P3-P4間が2,4mとやや不揃いである。

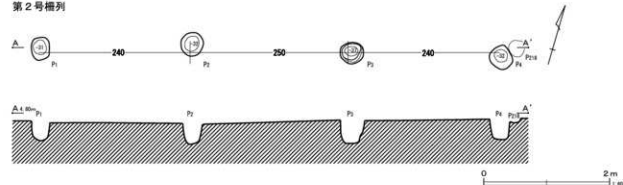
出土遺物がなく、時期は不明である。

第1号柵列



SA1
1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・炭化物粒子少量
2 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック多量、炭化物粒子若干

第2号柵列



第13図 第1・2号柵列

(3) 溝 跡

溝跡は計20条が検出された。このうち出土遺物や覆土の状態、重複関係などから第1号溝跡と第7号溝跡の2条が平安時代に、それ以外は中世以降に掘削されたものと考えられる。

a. 平安時代

第1号溝跡 (第14図)

第1号溝跡は、調査区東部のF-9・10、G-9グリッドに位置する。第6号掘立柱建物跡と一部重複しているが、新旧関係については不明である。なお、調査時には第21号溝跡と編号していたが、整理段階に新番号を付した。

南西から北東に向けてほぼ直線的に伸びており、北端部は擾乱によって壊される。確認長17.75m、幅0.28~0.70m、深さ0.04~0.10mである。主軸方位は、N-34°-Eを指す。

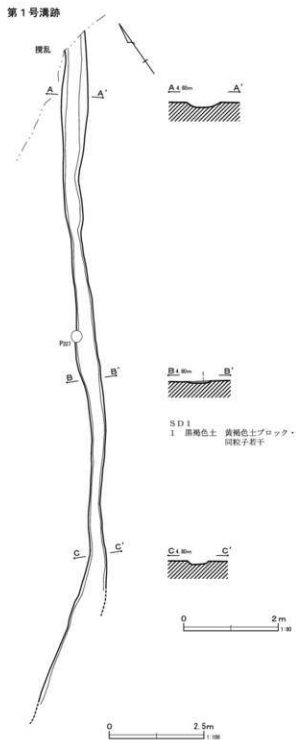
遺物は、平安時代のロクロ土師器環、須恵器環などが埋土中から出土した(第16図1・2)。1は内面及び外面の一部に黒色処理を施したロクロ土師器の環である。底部を欠損するため坑の可能性もある。2は南比企窯産の須恵器環の底部片である。ロクロ右回転による底部糸切り離し未調整で、周縁部を打ち欠き円板状に再加工を施す。周縁部は二次的な磨耗痕が顕著で、内底面も平滑である。用途については明確でないが、転用紡錘車の未成品であろうか。

第7号溝跡 (第17図)

第7号溝跡は、調査区北端から南に向かって伸び、「く」の字に折れ曲がり、南東方向に直線的に走行し、東端部は調査区外に伸びる。B~F-5、E~G-6、G・H-7グリッドに位置し、第1次調査と第2次調査の2回にわたって調査を実施した。

第3・8号溝跡、第3号井戸跡、第10・13号土坑と重複関係にあり、それぞれの遺構に切られていることが、土層断面の観察から判明した。

全長67.8m以上で、幅0.45~1.90m、深さ0.19~0.61mである。走行方位は、西側でN-20°-



第14図 第1号溝跡

E、屈曲した南側ではN-31°-Wを指す。

遺物は胴部外面に濃緑色の自然釉の掛かる須恵器瓶の破片があるにすぎない(第16図8)。

b. 中世以降

第2・3・4号溝跡



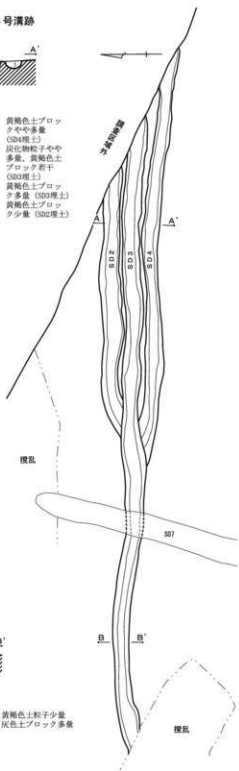
SD2・3・4

- 1 暗灰褐色土 黄褐色土ブロックやや多量 (SD4埋土)
- 2 暗灰褐色土 灰白物粒子やや多量、黄褐色土ブロック若干 (SD3埋土)
- 3 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック多量 (SD3埋土)
- 4 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック少量 (SD2埋土)



SD3

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子少量
- 2 褐色土 灰色土ブロック多量

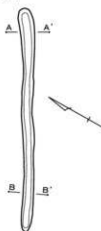


第15図 第2～6・9号溝跡

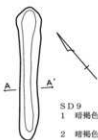
第5号溝跡



第6号溝跡



第9号溝跡



SD9

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子少量
しまり弱
- 2 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量
しまり弱

第2・3・4号溝跡 (第15図)

第2・3・4号溝跡は、調査区北西端部のB-5・6グリッドに位置し、第1次調査と第2次調査の2回にわたって調査を実施した。

3条の溝跡が東西方向に重なり合いながら走行する。それぞれの重複関係は明確でないが、先行する第3号溝跡に第2・4号溝跡が合流したものであろう。東端部は調査区外に延び、中央部で第

7号溝跡と直交し、それを切っている。

第2号溝跡は、確認長5.28m、幅0.35~0.46m、深さ0.13~0.25mである。主軸方位は、N-89°-Wを指す。第3号溝跡は、確認長13.36m、幅0.21~0.47m、深さ0.06~0.18mで、やや蛇行しながら走行する。主軸方位は、N-89°-Wを指す。第4号溝跡は、確認長8.86m、幅0.26~0.43m、深さ0.07~0.18mである。主軸方位は、N-84°-Wを指す。3条とも埋土は概ね自然堆積を示し、底面はほぼ平坦で掘り込みは浅い。

遺物は、第2号溝跡から近世の焙烙(第16図3)、第3号溝跡から古墳時代前期の高環(同4)、第4号溝跡から近世の磁器環、天目壇、焙烙(同5~7)などが出土した。

このうち4の高環は小破片のため詳細は不明であるが、東海系の小型有稜高環であろう。直接遺構に伴う遺物ではなく、周辺からの流れ込みと考えられる。しかし、この自然堤防上における該期の遺構の存在を示す貴重な遺物である。

第5号溝跡(第15図)

第5号溝跡は、調査区南部のH-7グリッドを中心に、一部G-7グリッドにかかる。第1次調査において検出されたもので、北西から南東に向けて直線的に延びる。北西端部は掘り込みが浅くなり、第2次調査では検出できなかった。確認長2.16m、幅0.19~0.40m、深さ0.01~0.05mである。主軸方位は、N-31°-Wを指す。

出土遺物はない。

第6号溝跡(第15図)

第6号溝跡は、調査区南端部のH-7・8グリッドに位置する。調査区際を南西から北東に向けて直線的に延びる。全長4.71m、幅0.18~0.32m、深さ0.03~0.05mである。主軸方位は、N-60°-Eを指す。底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。

遺物は出土しなかった。

第8号溝跡(第17図)

第8号溝跡は、調査区中央部西寄りのF-5・6、

G-6・7グリッドに位置する。第7・10号溝跡と重複し、第7号溝跡を切っていることが土層断面から判明したが、第10号溝跡との新旧関係については調査区の制約から明確にしない。

第7号溝跡に接するように南東から北西に向けて走行し、北西端部で直角に折れ曲がり南西に大きく向きを変える。さらに溝幅を広げながら、調査区際で第10号溝跡に合流する。確認長24.3m、幅0.51~2.68m、深さ0.07~0.24m。主軸方位は、北西側でN-57°-E、南側でN-39°-Wを指す。埋土は大きく4層に区分される。底面は概ね平坦である。遺物は細身の管状土錘の破片が出土したにすぎない(第16図2)。

第9号溝跡(第15図)

第9号溝跡は、調査区北西端部のB-5グリッドに位置し、第2次調査において検出された。

北東から南西方向に直線的に延びる全長2.83m、幅0.36~0.54m、深さ0.11~0.16mの小規模な溝跡である。主軸方位は、N-40°-Eを指す。

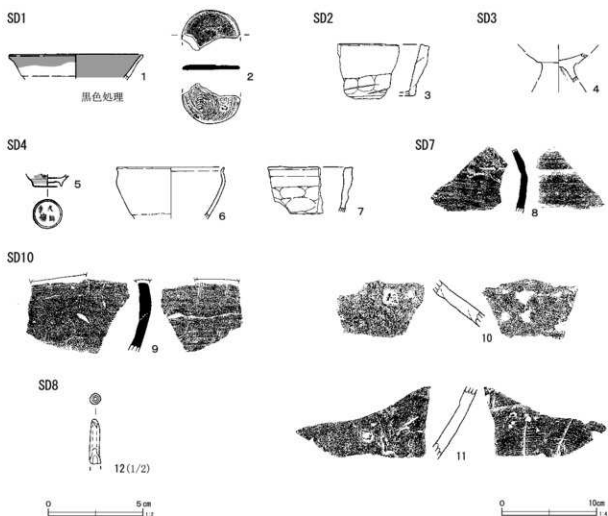
埋土は2層に区分され、自然堆積を示す。底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土しなかった。

第10号溝跡(第17図)

第10号溝跡は、調査区西端部から南縁にかけて弓なりに走行する比較的大きな溝跡である。C-E-4、E-G-5、G-H-6グリッドに位置する。第8・11・16号溝跡と重複しているが、新旧関係については明確でない。しかし、第8・11号溝跡はほぼ直交するように合流することから関連性が窺われる。南端は調査区域外へと延び全容は不明であるが、確認長53.70m、幅0.78~1.63m、深さ0.12~0.38mを測る。主軸方位は、N-21°-Wを指す。埋土は大きく4層に区分される。底面は概ね平坦で、断面形は逆台形に近い。

遺物は、溝跡北西側の埋土から9の須恵器瓶、11の陶器捏鉢が出土したほか、10の常滑系の甕がある(第16図9~11)。9は瓶頸の胴部破片であ



第16図 溝跡出土遺物

第1表 溝跡出土遺物観察表

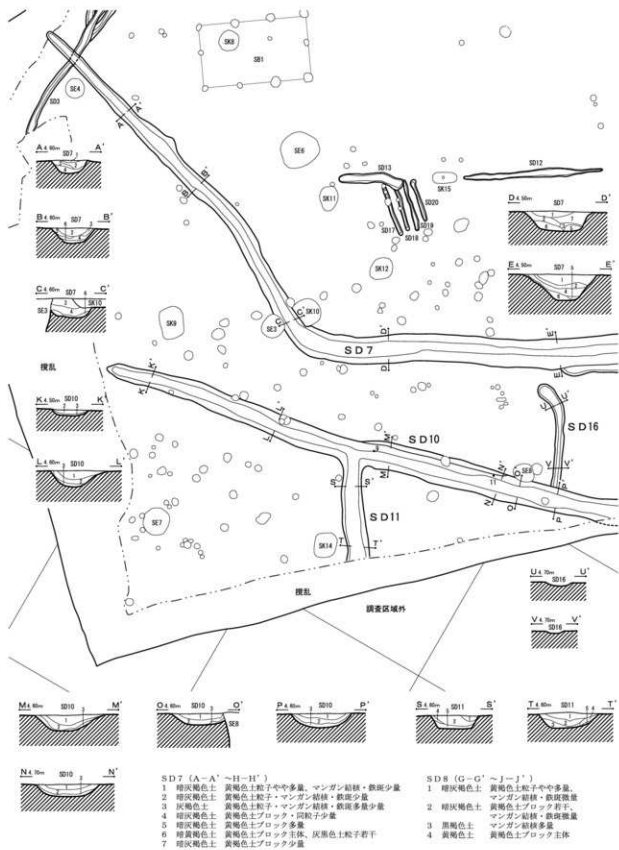
探検番号	遺構番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
第16図1	SD1	土師器	坏か	(14.0)	[2.7]		10	B・C・F・G・J	普通	鈍い橙	内外面黒色処理 酸化焙焼成
第16図2	SD1	須恵器	坏				底部	A・G・H・J	良好	灰白	円板状に再加工 周縁打ち欠き後磨耗
第16図3	SD2	土器	焙烙				破片	A・B・G・J	普通	鈍い黄橙	成型技法:型 体部外面指頭圧痕
第16図4	SD3	土師器	高坏		[3.1]		60	A・C・F・G・J	普通	鈍い黄橙	小型有種高坏 内外面磨耗顕著
第16図5	SD4	磁器	坏			3.0	80	A・G	良好	灰白	肥前産[大明年製] 18C中一後
第16図6	SD4	陶器	甕	(11.1)	[5.5]		20	A・G	良好	灰白	瀬戸美濃産 大目甕 鉄軸 18C後
第16図7	SD4	土器	焙烙				破片	A・B・G	普通	灰白	成型技法:型 体部外面指頭圧痕
第16図8	SD7	須恵器	甕				破片	A・G・J	良好	灰	東海産か 外面自然磨耗
第16図9	SD10	須恵器	甕				破片	A・C・J	良好	青灰	東金子窯産か 破断面二次的に磨耗
第16図10	SD10	陶器	甕				破片	A・G・J・K	良好	褐灰	常滑系 肩部破片 外面自然磨
第16図11	SD10	陶器	捏鉢				破片	A・G・J・K	良好	鈍い橙	SBSNo.1と同一個体か
第16図12	SD8	土製品	土鍾	残長:3.3cm	径:0.5×0.5cm			孔径:0.2cm 重さ:0.5g			残存:端部欠損 色調:鈍い橙色

る。破断面に二次的な研磨が施され、砥石などに転用された可能性がある。胎土等の特徴から東金子窯産と考えられる。他の遺物が中・近世のもの

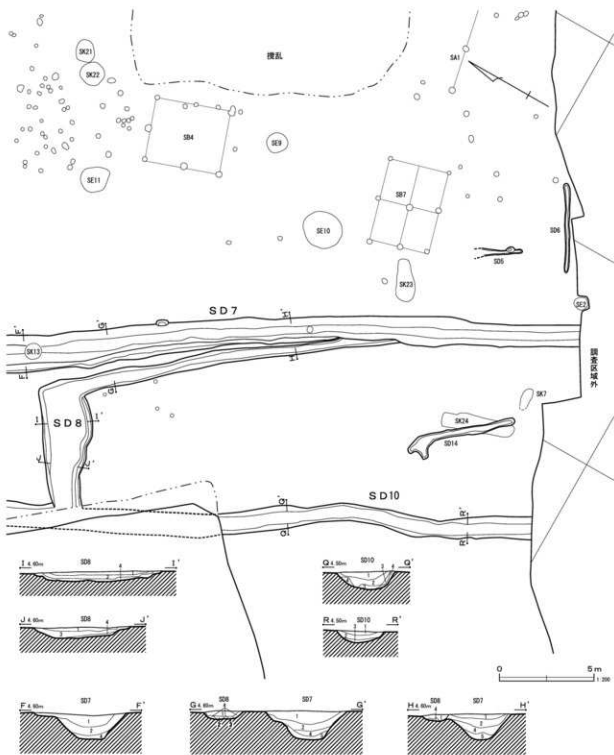
であることから混入であろう。

第11号溝跡 (第17図)

第11号溝跡はE-4グリッドに位置し、第10号



第17図 第7・8・10・11・16号溝跡



SD10 (K-K' ~ R-R')

- 1 褐色土 マンガン結核若干、黄褐色土粒子散在
- 2 暗灰褐色土 黄褐色土粒子・マンガン結核少量
- 3 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体、暗灰褐色土若干
- 4 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体

SD11 (S-S'・T-T')

- 1 灰褐色土 灰褐色土粒子多量、黄褐色土ブロック少量
- 2 暗灰褐色土 黄褐色土粒子少量
- 3 灰褐色土 灰褐色土粒子多量
- 4 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック多量、黒色土若干
- 5 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体



溝跡の北端付近に直交するように取り付き、南西側は調査区域外に延びる。

確認長5.04m、幅0.93~1.20m、深さ0.28~0.31mである。主軸方位は、N-57°-Eを指す。

埋土は5層に区分される。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第12号溝跡 (第18図)

第12号溝跡は、調査区中央部西寄りのD・E-6グリッドに位置し、第15号土壇及び第13号溝跡が同一線上に縦列している。

北西から南東方向に直線的に延び、全長7.34m、幅0.14~0.48m、深さ0.03~0.05mである。主軸方位は、N-34°-Wを指す。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

第13号溝跡 (第18図)

第13号溝跡は、調査区中央部西寄りのD-6グリッドに位置し、第18・19号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

北西から南東に向いやや蛇行する。全長3.83m、幅0.48~0.53m、深さ0.05~0.13mである。主軸方位は、N-25°-Wを指す。底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。遺物は出土しなかった。

第14号溝跡 (第18図)

第14号溝跡は、調査区南部のH-6グリッドに位置し、第24号土壇と重複する。

北西から南東に直線的に延びる。全長5.84m、幅0.32~0.75m、深さ0.15~0.26mである。主軸方位は、N-45°-Wを指す。底面は概ね平坦である。遺物は出土しなかった。

第15号溝跡 (第18図)

第15号溝跡は、調査区中央部北寄りのC・D-8グリッドに位置する。北西から南東に向かって直線的に延びている。全長5.84m、幅0.26~0.31m、深さ0.09~0.17mである。主軸方位は、N-31°-Wを指す。

埋土は3層に区分される。断面形は逆台形である。遺物は出土しなかった。

第16号溝跡 (第17図)

第16号溝跡は、調査区西部のE・F-5グリッドに位置する。北東から南西に向って弓なりに延び、第10号溝跡に合流する。

確認長5.84m、幅0.35~0.72m、深さ0.03~0.07mである。主軸方位は、N-54°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。遺物は出土しなかった。

第17~20号溝跡 (第18図)

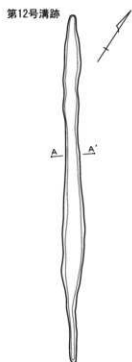
第17~20号溝跡は、調査区中央部北西寄りのD-5・6グリッドに位置し、第2次調査において検出された。第18号溝跡の北東端に第13号溝跡が重複しているほか、第151~155号ビットが重複する。この4条の溝跡は、北東から南西方向に長さ3m前後の短い溝がほぼ等間隔に並ぶことから、島の畝跡の可能性が考えられる。

第17号溝跡は、4条の溝跡のうち西端に位置し、第153~155号ビットが重複する。ほぼ直線的に延び、全長2.64m、幅0.21m、深さ0.04~0.08mである。主軸方位は、N-39°-Eを指す。底面は平坦で、掘り込みは浅い。遺物は出土しなかった。

第18号溝跡は、北東端部に第13号溝跡が重複する。ほぼ直線的に延び、確認長2.28m、幅0.20m、深さ0.02~0.04mである。主軸方位は、N-43°-Eを指す。底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。遺物は出土しなかった。

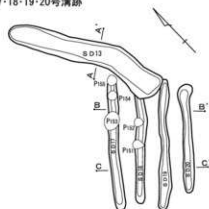
第19号溝跡は、ほぼ直線的に延び、全長2.78m、幅0.14~0.26m、深さ0.03~0.05mである。主軸方位は、N-44°-Eを指す。底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。遺物は出土しなかった。

第20号溝跡は、4条の溝跡のうち東端に位置する。ほぼ直線的に延び、全長2.28m、幅0.22m、深さ0.03~0.07mである。主軸方位は、N-43°-Eを指す。底面は概ね平坦で、掘り込みは浅い。遺物は出土しなかった。



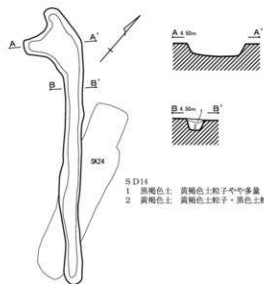
SD12
1 褐色土 黄褐色土ブロック面状に含む

第13・17-18-19-20号溝跡



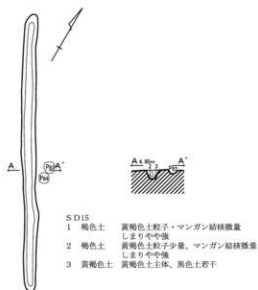
SD13
1 褐色土 黄褐色土粒子・マンガング結核・鉄屑少量 しまり弱
2 黄褐色土 黄褐色土層状に含む

第14号溝跡



SD14
1 褐色土 黄褐色土粒子やや多量 しまり弱
2 黄褐色土 黄褐色土粒子・黒色土粒子若干 しまり弱

第15号溝跡



SD15
1 褐色土 黄褐色土粒子・マンガング結核微量 しまりやや強
2 褐色土 黄褐色土粒子少量、マンガング結核微量 しまりやや強
3 黄褐色土 黄褐色土主体、黒色土若干



第18図 第12～15・17～20号溝跡

(4) 井戸跡

第1号井戸跡 (第19図)

第1号井戸跡は、調査区中央部南東寄りのF-8グリッドに位置する。第1次調査において攪乱層の下から検出された。平面形は径1.43×1.31mの円形で、確認面からの深さは0.85mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれていた。断面形は円筒形を呈する。遺物の出土はなかった。

第2号井戸跡 (第19図)

第2号井戸跡は、調査区南端に近いH-7グリッドに位置する。第1次調査A区の調査区際から検出された。平面形は径0.74×0.66mの楕円形で、確認面からの深さは0.41mである。壁はほぼ垂直に掘り込む。底面は平坦で、断面形は円筒形を呈する。遺物の出土はなかった。

第3号井戸跡 (第19図)

第3号井戸跡は、調査区西部のD-5グリッドに位置する。第7号溝跡と重複し、それを切っている。平面形は径1.22×1.12mの円形で、確認面からの深さは0.94m以上である。壁は急角度に掘り込まれ、断面形は円筒形に近い。遺物は陶器香炉が出土した(第21図1)。長石軸の掛かる信楽系の香炉である。底面には目痕を残す。

第4号井戸跡 (第19図)

第4号井戸跡は、調査区北端部のB-5グリッドに位置する。平面形は径1.04×1.00mの円形で、確認面からの深さは0.92m以上である。壁は急角度で掘り込まれ、断面形は円筒形を呈する。遺物は、陶器片口鉢、焙烙(第21図2・3)、鉄鎌(第23図5)、杭(第24図6)のほかに鳥類と考えられる動物の骨が出土した。

第23図5の鉄鎌はほぼ完存し、柄木の木質の一部が残る。茎の先端が棘手状に曲がり、その部分に目釘を打ち込み、さらに柄木先端に環状の留金具を装着する。第24図6は丸木の先端を削った杭である。上端は刃物で斜めに切り落とされている。杭先は4面で、長さ2.9cmである。

第5号井戸跡 (第19図)

第5号井戸跡は、調査区北部のC-6・7グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡の東側に隣接し、南東側に第14号井戸跡が並ぶ。

平面形は径2.50×2.38mの円形で、比較的規模が大きい。確認面から深さは1.44mまで掘り下げたが、湧水が激しく底面まで掘りきることができなかった。上半部は漏斗形に大きく開いているが、下半部はほぼ垂直に掘り込まれていた。

遺物は陶器皿・捏鉢・挿鉢・焙烙、砥石(第21図4~10)のほか、柄杓・農具柄等の木製品(第24図1・2)、アカニシが出土した。

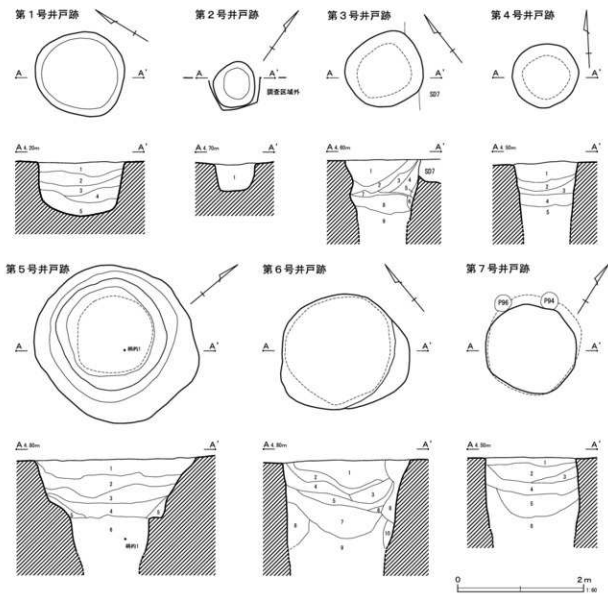
第21図4は瀬戸美濃産の皿で長石軸が掛かる。5は瀬戸美濃産の削り出し高台の皿で、内外面に灰軸が掛かる。6は在地産の捏鉢で、内面平滑。7は瀬戸美濃産の笠原鉢で、内面に鉄絵で秋草文様が描かれ、内外面に灰軸が掛かる。8は丹波産の播鉢で、目目7本/条である。9は焙烙で内耳部分を欠損する。10は凝灰岩製の砥石である。

第24図1の柄杓は、曲物の底板を半分欠損しているがほぼ完形で、各部材の結合方法が良くわかる例である。側板は柄孔両脇の2箇所を樹皮紐で固定し、内面結合部付近に約8mm間隔でケビキを引く。側板と底板は樹皮紐で2箇所を固定している。柄の先端は、側板内面に樹皮紐でつけられた「小猿」の孔に固定されている。また、柄が抜けないように側板近くの柄の部分に木釘を打っている。柄は先端に向かって細くなり、柄の断面は方形で、面取りが施されている。第24図2の柄は、丸木の先端を丸く削り出したものである。農具の柄と思われるが狂痕或使用痕がなく不明である。全面に樹皮が残存する。

第6号井戸跡 (第19図)

第6号井戸跡は、調査区北部のC-6、D-5・6グリッドに位置する。

平面形は径2.03×1.80mの不定形で、確認面



- SE 1
 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量
 2 暗褐色土 黄褐色土粒子少量
 3 灰黒色土 マンガン結核多量、粘性強
 4 灰色粘土 4層下に黒色ビート層が部分的に入る
 5 灰色粘土

- SE 2
 1 灰褐色土 粘質灰褐色土粒子若干

- SE 3
 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量
 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量
 3 灰褐色土 黄褐色土ブロック、灰褐色土ブロック多量
 4 暗褐色土 灰褐色土ブロック若干
 5 黄褐色土 混入物少ない
 6 灰白色土 混入物少ない
 7 暗赤褐色土 灰褐色土主体、鉄炭多量
 8 暗灰褐色土 黄褐色土主体、鉄炭少量
 9 暗灰褐色土 混入物少ない

- SE 4
 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック、同粒子多量、マンガン結核若干
 2 暗灰褐色土 灰褐色土ブロック若干
 3 灰褐色土 黄褐色土ブロック多量
 4 灰褐色土 粘質灰褐色土粒子若干
 5 暗灰褐色土 粘質灰褐色土粒子若干

- SE 5
 1 暗褐色土 マンガン結核多量、黄褐色土粒子若干
 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量
 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量
 4 暗褐色土 灰褐色土ブロック多量
 5 灰褐色土 黄褐色土ブロック・灰白色粘土ブロック多量
 6 暗灰褐色土 均質な粘質土

- SE 6
 1 褐色土 マンガン結核多量、黄褐色土ブロック若干
 2 暗褐色土 黄褐色土・黒色土層状に含む
 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量
 4 褐色土 黄褐色土ブロック多量
 5 暗赤褐色土 黄褐色土少量
 6 灰赤褐色土 黄褐色土ブロック少量
 7 暗灰褐色土 黄褐色土粒子・黄褐色粘土微量
 8 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体
 9 暗灰褐色土 均質な粘質土
 10 暗灰褐色土 9層よりやや多い

- SE 7
 1 灰褐色土 黄褐色土ブロック主体、黄褐色土粒子・マンガン結核少量
 2 灰褐色土 黄褐色土ブロック少量、黄褐色土粒子
 3 灰褐色土 鉄炭多量、黄褐色土ブロック若干
 4 暗灰褐色土 均質な粘質土、しまり弱
 5 暗灰褐色土 均質な粘質土
 6 暗灰褐色土 粘質灰褐色土粒子若干

第19図 井戸跡 (1)

からの深さは1.34m以上である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、断面形は円筒形を呈する。

遺物はかわらけ、陶器碗・香炉、桃核（第21図11～14）、板材（第24図7・8）が出土した。

第24図7は、上下端を欠損する細長い板状の加工材である。背面は丸木のままで、正面は分割後の加工により平滑に仕上げられている。8は径10cm程の木を分割した板材である。外皮付近を用いており断面形は半円形を呈する。分割後の調整により正面は平坦で、下端を斜めに削っている。

第7号井戸跡（第19図）

第7号井戸跡は、調査区西端部のD-3・4グリッドに位置する。

平面形は径1.44×1.39mの円形で、確認からの深さは1.10m以上である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、断面形は円筒形である。

埋土中に一括廃棄されたような状態で、磁器碗・皿、青磁香炉、磁石、土製円板（第22図15～20・29）、煙管、和釘（第23図1～3）、桶・曲物・棒状製品・建築材・杭（第25図9～25）などの遺物が多量に出土した。

第25図9は、浅い桶の側板である。側板は約95°外側に開き、復元径約28cmである。外面下端に圧痕が残る。幅は上から下に向かって狭く、厚さは下に向かって薄くなっている。10は円形の曲物の底板で大半を欠損する。復元径19.2cmである。正面、背面とも木目が表れていて凹凸がある。釘孔等は見られない。11は桶の底板の一部である。大部分を欠損しているが、円形で復元径18.4cmである。中央付近が厚く、側面付近はやや薄い。正面は平滑であるが、背面は木目が表れているため平坦ではない。12は長方形の長板で、左右端を欠損する。加工痕はほとんどなく分割したままで、表面に木目がはっきり見えている。鉄釘が2箇所残存する。釘の断面は三角形で先端に向かって徐々に細くなっている。

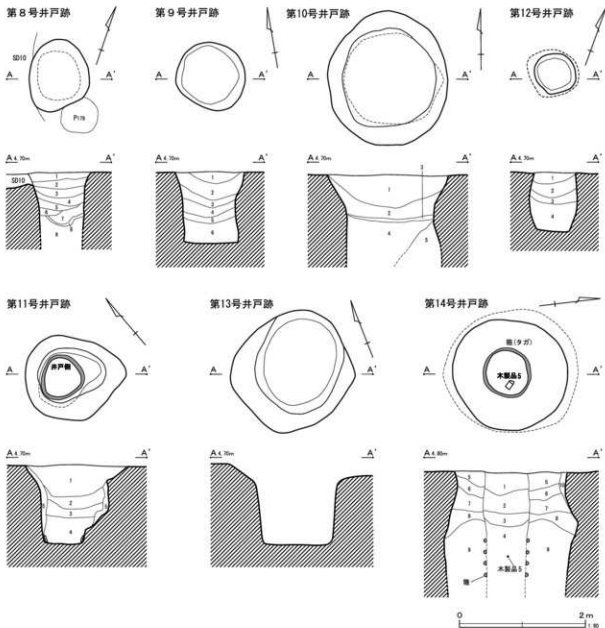
13・14は用途不明の棒状製品である。13は断面

が三角形に近いものである。角材の正面・背面の左半分を削って左側を薄く仕上げる。上部はやや薄くなり、欠損する。仕上げの様子から製品の一部と考えられる。14は用途不明の棒状製品である。上下端に向かって幅狭になり、厚みもやや減じる。断面形は上下端が長方形で中央は半円形に近い。上方に貫通している円孔があるが、下方にもう1箇所あったと推定される。

15～18は建築材である。15は建築材の下部を切り落としたものである。転用または再利用時に切られたものと考えられる。下端を鋸状のもので切り、上端は2面で尖らせている。下方は上面を削っており、断面は半円形である。16は上部を欠損する建築材である。下方は正面・背面をチョウナで削り、薄く仕上げている。樹皮面が残っている。17は上部を欠損する角材である。各面とも平滑で、角は1辺のみ面取りされている。下端は鋭利な刃物で垂直にたち落とされている。18は上部を欠損する角材である。丸木の木表2面を削って角材にしており、側面は丸木の面が残っている。下部に鉄釘が残存している。釘の頭部は円形で頭部より下の断面は方形である。

19～21は杭である。19は丸木を削った杭で、杭先のみ加工を施す。上部は欠損する。杭先は剥離し、潰れている。杭先は4面で長さ3.6cmである。20は丸木を削って作った杭で、上部を欠損する。杭先は2面で長さ7.1cmである。21は丸木を半截し、木表を剥がして作った杭で、側面は丸木の表面が残っている。上端は切り落とされ、正面・背面に加工痕を残す。杭先は5面で長さ6.5cmである。

22～25は板材である。22は端部が半円形の板材で、表面は平滑に仕上げられる。2孔1組の木釘穴が左側面に3箇所、右側面に2箇所あり、断面方形の木釘が1本だけ孔内に残存する。また正面から背面に貫通する鉄釘穴が9孔確認される。そのうち1孔内に断面方形の鉄釘が残存する。23は



- SE 8
- 1 褐色土 マンガン結核少量
 - 2 暗褐色土 マンガン結核少量 粘性強
 - 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック、同粒子微量 粘性強
 - 4 黒褐色土 黄褐色土ブロック、同粒子少量 粘性強
 - 5 暗褐色土 黄褐色土ブロック、同粒子多量 粘性強
 - 6 黒褐色土 黄褐色土ブロック微量 粘性強
 - 7 暗黄褐色土 黄褐色土主体、黒色土粒子若干 粘性強
 - 8 灰黄褐色土 灰褐色土若干 粘性強
 - 9 暗黄褐色土 黄褐色土主体、黒色土粒子やや多量 粘性強

- SE 9
- 1 暗褐色土 マンガン結核若干、黄褐色土粒子微量
 - 2 暗褐色土 灰褐色土粒子、マンガン結核若干
 - 3 暗褐色土 灰褐色土粒子やや多量、マンガン結核若干
 - 4 暗褐色土 黄褐色土粒子、灰褐色土粒子、灰化本多量
 - 5 黄褐色土 黄褐色土主体、黄褐色土ブロック、黒色土粒子若干
 - 6 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック、鉄屑少量

- SE 10
- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック微量 粘性やや強
 - 2 暗褐色土 暗灰褐色土粒子多量、黄褐色土粒子少量
 - 3 暗褐色土 灰褐色土主体、鉄屑多量
 - 4 暗灰褐色土 均質な粘質土、黒色土粒子若干
 - 5 灰褐色土 均質な粘質土

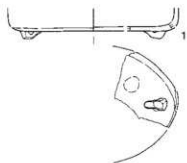
- SE 11
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子微量
 - 2 暗褐色土 黄褐色土粒子やや多量
 - 3 暗褐色土 黄褐色土粒子多量、黄褐色土粒子若干
 - 4 暗褐色土 灰褐色土ブロック若干
 - 5 黄褐色土 黄褐色土、灰褐色土、黒色土の混合土

- SE 12
- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量
 - 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量
 - 3 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック主体
 - 4 黒褐色土 灰褐色土ブロック若干 粘性強

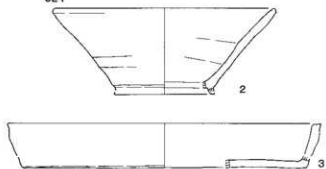
- SE 14
- 1 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体、暗灰褐色土粒子若干
 - 2 灰褐色土 黄褐色土ブロック主体、暗灰褐色土粒子少量
 - 3 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック主体、暗灰褐色土ブロック、灰白色土ブロック若干
 - 4 灰褐色土 灰褐色土ブロック主体、灰白色土ブロック若干
 - 5 灰褐色土 灰褐色土ブロック主体、暗灰褐色土粒子若干
 - 6 灰褐色土 灰褐色土ブロック主体、灰白色土ブロック少量
 - 7 灰褐色土 灰褐色土ブロック主体、灰白色土ブロック多量
 - 8 暗黄褐色土 黄褐色土ブロック主体、暗灰褐色土粒子若干
 - 9 暗灰褐色土 均質な粘質土
 - 10 黄褐色土 風入物少ない

第20図 井戸跡 (2)

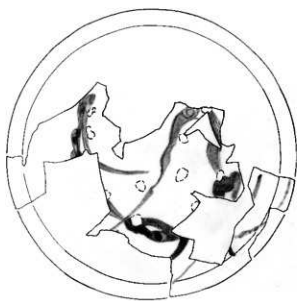
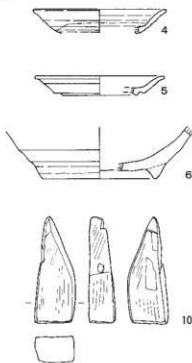
SE3



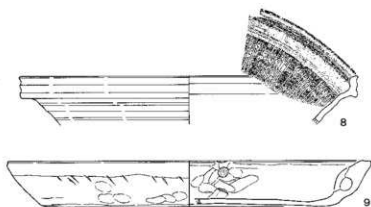
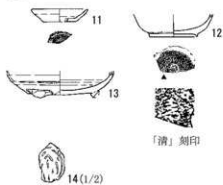
SE4



SE5



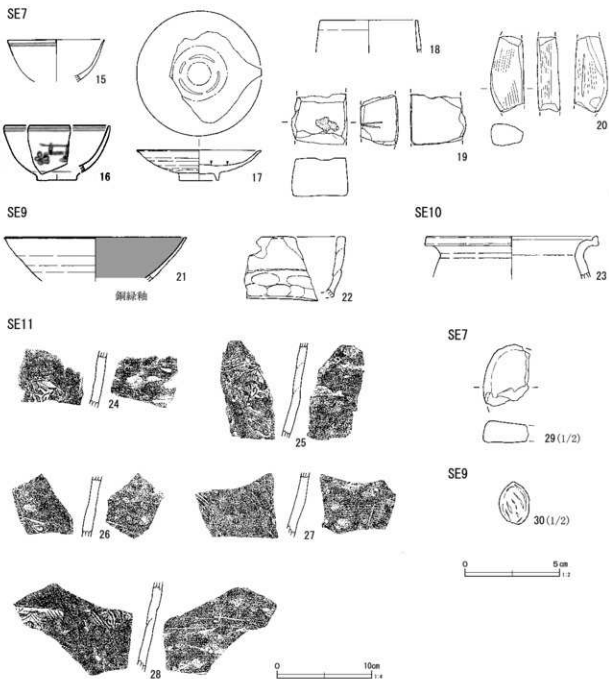
SE6



0 5cm 1:2

0 10cm 1:4

第21图 井戸跡出土物(1)



第22図 井戸跡出土遺物(2)

長方形の板材で、やや歪曲していることから、桶状に円形に組むと考えられる。井戸枠の側板の可能性もある。下部はやや薄くなっている。表面は全体に平滑である。24は長方形の板材である。正面は下方を斜めに削って薄い。背面はやや湾曲する。25は長方形の板材である。正面は平滑で、背面は木目が表れ凹凸が目立つ。下端の角を斜めに

切り落とす。表面の仕上げや下端の加工から製品であることは間違いないが、用途は不明である。節が多く良材ではない。

第8号井戸跡(第20図)

第8号井戸跡は、調査区中央部西寄りのE-5グリッドに位置する。

第10号溝跡及び第179号ピットと重複し、第10

第2表 井戸跡出土遺物観察表

種別番号	遺物番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
第21図1	SE 3	陶器	香炉		[3,3]	(17,6)	20	A-G	良好	灰白	信楽系 長石軸 底面目痕
第21図2	SE 4	陶器	片口鉢	(22,0)	[8,9]	(10,4)	20	A-C-F-J	良好	鈍い黄褐色	口部残存 内面平滑
第21図3	SE 4	土器	焙烙		[1,3]	30,2	35	A-B-F-G-J	普通	灰黄	成型技法:型 角四石粒子多量
第21図4	SE 5	陶器	皿	(13,8)	[2,5]		20	A-G	良好	灰白	瀬戸美濃産 長石軸 18C中
第21図5	SE 5	陶器	皿	(13,4)	2,1	(7,9)	20	A-G	良好	灰白	瀬戸美濃産 削り出し高台 18C中
第21図6	SE 5	陶器	捏鉢		[5,5]	(12,0)	25	A-C-G-J-K	良好	灰白	在地産 内面平滑
第21図7	SE 5	陶器	鉢	(30,0)	7,7	14,6	35	A-G-J	良好	灰黄	瀬戸美濃産 笠原跡 鉄銚 18C中
第21図8	SE 5	陶器	搦鉢	(35,6)	[5,1]		20	A-G-K	良好	灰黄	丹波産 小塚頭蓋
第21図9	SE 5	土器	焙烙	(38,2)	4,9	(31,2)	25	A-D-F-K	普通	鈍い赤褐色	体部外面一部スス付着 金雲母顕著
第21図10	SE 5	石製品	砥石	長さ:11,2cm	幅:4,1cm	厚さ:2,8cm	重さ:194,1g				凝灰岩製 先端部尖る 砥面4面
第21図11	SE 6	土器	皿	(5,9)	1,3	(3,5)	20	A-B-C-F-J	良好	橙	口ロ整形 かかわりけ
第21図12	SE 6	陶器	碗		[2,4]	(5,0)	40	A-G	良好	灰白	肥前産 京焼風 17C後~18C
第21図13	SE 6	陶器	香炉		[2,9]	(6,5)	50	A-G	良好	灰白	内外面鉄軸 内面積火焼き痕
第21図14	SE 6	種子	桃核	長さ:2,1cm	幅:1,8cm	厚さ:1,0cm	重さ:0,7g				
第22図15	SE 7	磁器	碗	(10,0)	[4,4]		45	A-G	良好	灰白	肥前産 17C後半~18C前半
第22図16	SE 7	磁器	碗	(11,0)	[5,0]		25	A-G	良好	灰白	肥前産 18C中頃
第22図17	SE 7	磁器	皿	(13,0)	3,2	4,1	25	A-G	良好	灰白	肥前産 見込み蛇ノ目輪割ぎ 18C
第22図18	SE 7	青磁	香炉	(10,4)	3,5		20	A-G	良好	灰白	肥前産 貫入あり 輪外面のみ
第22図19	SE 7	石製品	砥石	長さ:5,3cm	幅:5,9cm	厚さ:4,0cm	重さ:193,7g				砂岩製 上下端部欠損 砥面3面
第22図20	SE 7	石製品	砥石	長さ:8,0cm	幅:3,5cm	厚さ:2,4cm	重さ:99,1g				凝灰岩製 上下端欠損 砥面4面
第22図21	SE 9	磁器	碗	(18,9)	[4,7]		20	A-G	良好	灰白	肥前産(内野山) 17C後~18C前
第22図22	SE 9	土器	焙烙					A-B-G-J	普通	黄灰	成型技法:型 体部外面 指頭圧痕
第22図23	SE10	陶器	甕	(17,8)	[4,6]		20	A-G-J	良好	鈍い赤褐色	内外面ココナデ
第22図24	SE11	陶器	甕					A-F-J-K	良好	浅黄褐色	丹波産か 刻印あり
第22図25	SE11	陶器	甕					A-F-J-K	良好	鈍い褐色	丹波産か 刻印あり
第22図26	SE11	陶器	甕					A-F-J-K	良好	褐色	丹波産か 刻印あり
第22図27	SE11	陶器	甕					A-F-J-K	良好	鈍い褐色	丹波産か 刻印あり
第22図28	SE11	陶器	甕					A-F-J-K	良好	褐色	丹波産か 刻印あり
第22図29	SE 7	土製品	円板	残長:3,3cm	残幅:3,2cm	厚さ:0,9~1,1cm	重さ:8,4g				色調:灰白色 側縁部亀裂痕
第22図30	SE 9	種子	桃核	長さ:2,3cm	幅:1,6cm	厚さ:1,3cm	重さ:1,6g				

号溝跡を切っている。平面形は径1.12×0.95mの楕円形で、確認面からの深さは0.85m以上である。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、断面形は円筒形を呈する。遺物は出土しなかった。

第9号井戸跡 (第20図)

第9号井戸跡は、調査区中央部南寄りのF-7グリッドに位置する。平面形は径1.11×1.04mの円形で、確認面からの深さは1.12mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面は概ね平坦で、断面形は円筒形を呈する。

遺物は磁器碗、焙烙、桃核(第22図21・22・30)、棒状鉄製品(第22図4)、箱側板・曲物底板(第22図3・4)が出土した。

第22図21の磁器碗は、肥前内野山窯産で銅緑軸と透明釉を掛けかけている。

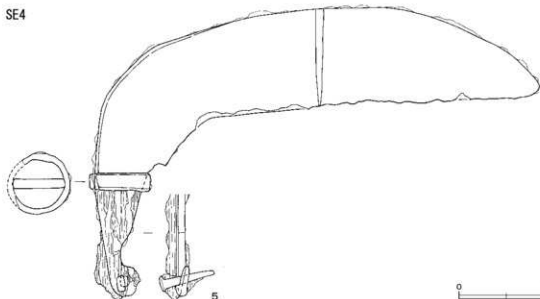
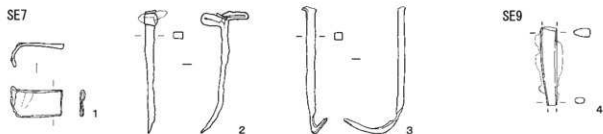
第22図3は箱の側板である。上面の1箇所に径

0.2cm、深さ1.0cmの木釘穴があり、その中に木釘が残存する。また、各辺に沿って正面から背面に貫通する孔がある。背面両端部には、製作時の目安線と考えられる切込みが入っている。4は方形曲物の底板で、小型で薄手の作りである。

第10号井戸跡 (第20図)

第10号井戸跡は、調査区中央部南寄りのG-7グリッドに位置する。平面形は径2.21×1.90mの円形で、比較的大きい。湧水が激しく底面まで掘り下げることができなかったが、確認面から1.07mまでを確認した。上半部が漏斗形に大きく開き、下半部はほぼ垂直に掘り込み円筒形を呈する。

遺物は、陶器甕の口縁部片が出土しただけである(第22図23)。口径17.8cmに復元され、口唇部を上方に短くつまみ上げる。



第23図 井戸跡出土鉄製品

第3表 井戸跡出土鉄製品観察表

種別番号	遺構番号	種別	器種	法量・特徴
第22図 1	SE 7	銅製品	標管	残長:2.8cm 幅:1.4cm 重さ:3.8g 真鍮製 押し潰され大きく変形 標首の首部の破片
第22図 2	SE 7	鉄製品	和釘	長さ:6.5cm 断面矩形:0.5×0.4cm 重さ:7.1g 頭部T字形
第22図 3	SE 7	鉄製品	和釘	長さ:6.6cm 断面矩形:0.4×0.4cm 重さ:6.5g 頭部欠損
第22図 4	SE 9	鉄製品	棒状	残長:4.2cm 断面矩形:0.9×0.5cm/0.5×0.3cm 重さ:8.0g 下端に向かって幅を減ずる
第23図 5	SE 4	鉄製品	鎌	長さ:23.5cm 刃部長:19.7cm 刃部幅:5.1cm 留金径:3.3cm 目釘長:3.0cm 重さ169.0g

第11号井戸跡 (第20図)

第11号井戸跡は、調査区中央部西寄りのE・F-6・7グリッドに位置する。平面形は径1.60×1.30mの不定形で、確認面からの深さは1.26mである。上半部は漏斗形に大きく開き、下半部はほぼ垂直に掘り込まれ、断面形は円筒形を呈する。底面には井戸側と考えられる径70cmほどの円形にめぐる木質部分が残っていた。曲物もしくは結桶の側板と考えられるが、遺存状態が悪く明確にし

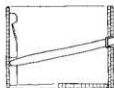
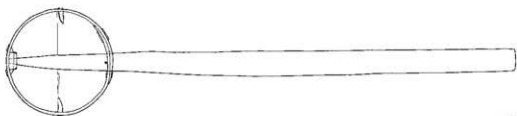
得なかった。

遺物は埋土から陶器甕の胴部片(第22図24~28)がまとまって出土した。丹波産と考えられるもので、肩部外面に刻印が見られる。胎土、焼成、色調などが近似しており、同一個体である。

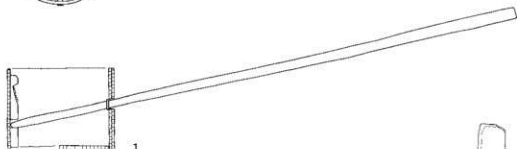
第12号井戸跡 (第20図)

第12号井戸跡は、調査区東端部のE-10グリッドに位置する。平面形は径0.69×0.61mの円形で、確認面からの深さは0.93mである。壁はや

SE5



1



SE9



3



2

SE4

SE6



6



7

SE14



5



4



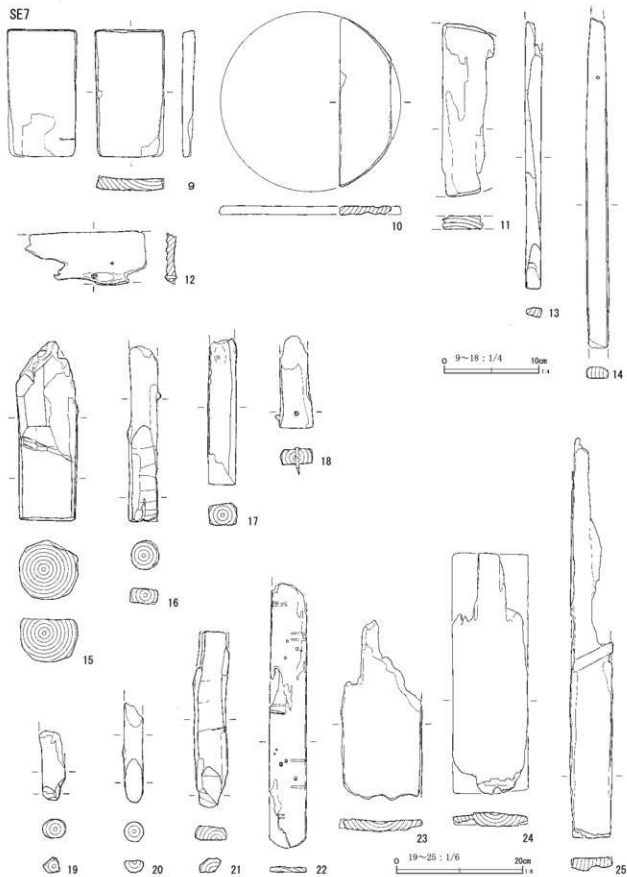
8

0 1~5 : 1/4 10cm

0 6~8 : 1/6 20cm

第24图 井戸跡出土木製品(1)

SE7



第25图 井戸跡出土木製品(2)

第4表 井戸跡出土木製品観察表

種別番号	遺構番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
第24図 1	SE 5	柄杓	54.1	径11.3	高さ8.7	椀目 曲物柄杓
第24図 2	SE 5	柄	[22.2]	2.8	2.8	芯持材
第24図 3	SE 9	箱	[6.7]	18.2	0.5	椀目 側板
第24図 4	SE 9	曲物	[9.4]	[3.3]	0.4	椀目 底板
第24図 5	SE14	桶	11.6	7.1	1.1	椀目 側板 取上 No. 1
第24図 6	SE 4	杭	31.0	5.4	5.3	芯持材
第24図 7	SE 6	板材	[34.8]	8.0	1.5	椀目
第24図 8	SE 6	板材	[86.7]	7.5	2.2	椀目
第25図 9	SE 7	桶	13.5	[7.0]	1.2	椀目 側板
第25図 10	SE 7	曲物	(19.2)	(19.2)	1.9	椀目 底板
第25図 11	SE 7	桶	(18.4)	[4.3]	1.4	椀目 底板
第25図 12	SE 7	板材	[12.6]	(5.5)	1.0	椀目 鉄釘残存
第25図 13	SE 7	棒状製品	[28.4]	1.6	1.0	椀目
第25図 14	SE 7	棒状製品	[35.2]	2.3	1.2	椀目
第25図 15	SE 7	建築材	28.2	9.3	9.3	芯持材
第25図 16	SE 7	建築材	[27.7]	4.3	4.5	芯持材
第25図 17	SE 7	角材	[22.8]	4.4	3.4	芯持材
第25図 18	SE 7	角材	[14.6]	5.0	2.4	芯持材 鉄釘残存
第25図 19	SE 7	杭	[10.9]	3.6	3.0	芯持材
第25図 20	SE 7	杭	[15.4]	3.1	3.1	芯持材
第25図 21	SE 7	杭	27.9	5.0	2.1	芯持材
第25図 22	SE 7	板材	[41.9]	5.7	0.8	椀目 木釘残存
第25図 23	SE 7	板材	[27.9]	(13.1)	1.7	椀目
第25図 24	SE 7	板材	38.1	11.8	2.3	椀目
第25図 25	SE 7	板材	[63.5]	6.3	2.0	椀目

※ () 推定値 [] 残存値

やオーバーハングし、断面形は樽形を呈する。遺物は出土しなかった。

第13号井戸跡 (第20図)

第13号井戸跡は、調査区東端部のF-11グリッドに位置する。

平面形は径1.88×1.75mの円形で、確認面からの深さは1.27mである。下半部はほぼ垂直に掘り込まれ円筒形を呈するが、上半部は漏斗形に大きく開く。遺物の出土はなかった。

第14号井戸跡 (第20図)

第14号井戸跡は、調査区北部のC-6・7グリッドに位置し、第5号井戸跡の南側に隣接する。なお、調査時は第10号土壌と編号して調査を行ったが、整理作業段階で新しく番号を振り替えた。

平面形は径1.85×1.77mの円形で、比較的大型の井戸である。湧水が激しく底面は検出できなかったが、深さ1.58mまでを確認した。壁はほ

ぼ垂直に掘り込まれ、断面形は円筒形を呈する。確認面から1mほど下で、径約70cmの円形にめぐる竹製の箍(タガ)が検出され、結桶を井戸側として用いていたことが判明した。箍は約20cmの等間隔にめぐり、4段ほどが検出された。土層断面の観察からすれば、使用時には結桶の底を抜いて入れ子状に重ねた井戸側が存在し、井戸廃絶時に結桶を抜き取り、黄褐色土ブロックを主体とする粘質土によって埋戻されたものと想定される。その際に竹製の箍だけが掘方土に残されたのであろう。

遺物は第4層の中から桶の側板(第24図5)が出土したほか、アカニシと考えられる巻貝の破片が少量出土した。

第24図5は桶の側板で、内面下部に底板をはめる段差がある。外面下部には箍の圧痕が2段認められる。

(5) 土 壤

土壌は、自然堤場の西縁を南下する第10号溝跡の東側に広範囲に分布し、計24基が検出された。遺物が伴うものは少なく、平安時代のロクロ土師器と砥石を出土した第16号土壌のほかは、第6号土壌から近世の陶磁器・土器がややまとまって出土しただけである。

a. 平安時代

第16号土壌 (第26図)

第16号土壌は調査区中央部北寄りのD-8グリッドに位置し、第2次調査において検出された。

平面形はやや細長い楕円形で、規模は長軸長1.72m、短軸長0.65m、深さ0.10mである。主軸方位はN-36°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に大きく分けられる。

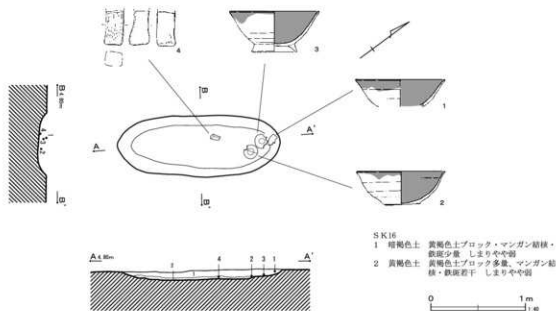
遺物は、北東端部の壁際にほぼ完形のロクロ土師器の坏 (第27図2) と埴 (同図3) が内面を上にした状態で、口縁部を接するように置かれていた。また、それらに接してロクロ土師器坏の口縁部片 (同図1) が、内面を上にした状態で出土した。当初は3点の土器が、壁際に並べられていた

状況が復元される。この他に土壌中央部やや西壁寄りの底面から小型の砥石 (同図4) が1点出土した。

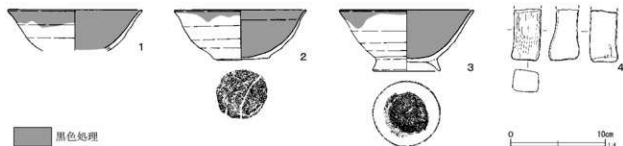
1～3は内面及び外面の一部を黒色処理したロクロ土師器である。1は底部を欠損しているため高台の付く可能性も残る。内面はミガキのような光沢はないが、ナデにより平滑に仕上げる。2の坏は内面の器表面が薄く剥離し、黒色処理の残りは良くない。底部調整は磨耗が著しく明瞭でないが、糸切り離し後強いナデを施しているものと思われる。3は高台の付いた埴である。2と同様に内面の器表面が薄く剥離する。底部調整は高台貼り付け後のナデによって消され、明瞭でない。4は砂岩製の砥石で、上半部を折損する。各面とも良く使い込まれている。

土壌の性格については、人骨などは残されていなかったが、遺物の出土状況から頭部周辺に土器を配し、胸元に砥石を置いたような副葬状況が想定されることから土壌墓の可能性を指摘しておくたい。

時期は9世紀末葉から10世紀初頭頃であろう。



第26図 第16号土壌



第27図 第16号土坑出土遺物

第5表 第16号土坑出土遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
第27図1	SK16	土師器	坏か	(14,0)	[4,3]		25	A・C・F・J	普通	鈍い橙	内外面黒色処理 酸化焙焼成
第27図2	SK16	土師器	坏	13,8	5,3	5,6	95	A・C・F・J	普通	鈍い橙	内外面黒色処理 酸化焙焼成
第27図3	SK16	土師器	埴	(14,0)	6,5	7,0	75	A・C・F・J	普通	鈍い橙	内外面黒色処理 酸化焙焼成
第27図4	SK16	石製品	砥石	残長: 5.4cm	幅: 3.2cm	厚さ: 3.0cm					砂岩製 上半部欠損 砥面4面

b. 中世以降

第1号土坑 (第28図)

第1号土坑は、調査区南東部のG-8・9グリッドに位置し、第1次調査において検出された。

平面形はピットが集めたような不定形で、規模は長軸長2.55m、短軸長1.21m、深さ0.27mである。主軸方位はN-80°-Eを指す。

底面は凹凸が目立ち、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は大きく3層に分けられ、黄褐色土ブロックや炭化物を混入することから埋戻しと考えられる。

遺物は出土していない。

第2号土坑 (第28図)

第2号土坑は、調査区中央部北寄りのC-8グリッドに位置し、第1次調査において検出された。

平面形はピットの接続した不定形で、規模は長軸長1.06m、短軸長0.52m、深さ0.50mである。主軸方位はN-44°-Eを指す。

底面は凹凸があり、壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は3層に分けられ、黄褐色土ブロックと焼土、炭化物等を混入することから埋戻しと考えられる。

遺物は実測図示できなかったが、かわらけ、砥石の小破片が出土した。

第3号土坑 (第28図)

第3号土坑は、調査区中央部北寄りのC-8グリッドに位置し、第1次調査において検出された。

平面形はピットの接続した不定形で、規模は長軸長0.98m、短軸長0.50m、深さ0.50mである。主軸方位はN-87°-Eを指す。

底面は丸みを帯び、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は大きく2層に分けられ、黄褐色土ブロックや炭化物を含む。

遺物は実測図示できなかったが、土師器甕と火鉢と考えられる土器片が出土した。

第4号土坑 (第28図)

第4号土坑は、調査区中央部北寄りのC-7グリッドに位置し、第1次調査において検出された。北側は一部調査区域外にかかる。

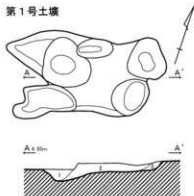
平面形は略円形で、規模は長軸長1.38m、短軸長1.06m以上、深さ0.30mである。主軸方位はN-67°-Wを指す。底面は概ね平坦で、壁は外傾しながら直線的に立ち上がる。

遺物は第31図1のかわらけのほかに、実測図示していないが、焙烙、磁器碗の小破片が出土した。

第5号土坑 (第28図)

第5号土坑は、調査区中央部北寄りのC-7グリッドに位置し、第1次調査において検出された。

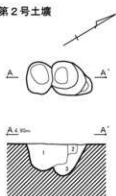
第1号土壤



SK1

- 1 暗褐色土 混入物少ない
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック・炭化物ブロック少量
- 3 黄褐色土 黄褐色土ブロック若干

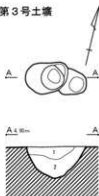
第2号土壤



SK2

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量、マンガン結核少量
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒子・炭化物粒子少量
- 3 暗褐色土 焼土粒子少量

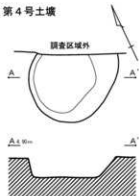
第3号土壤



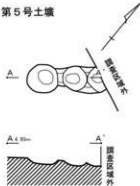
SK3

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量
- 2 暗褐色土 炭化物粒子少量

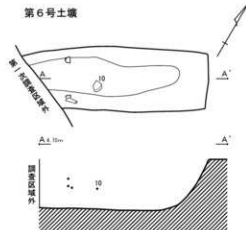
第4号土壤



第5号土壤



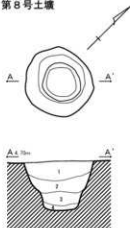
第6号土壤



第7号土壤



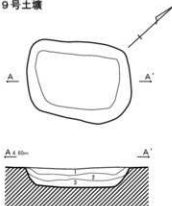
第8号土壤



SK8

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・マンガン結核若干
- 2 暗褐色土 黄褐色土ブロック多量
- 3 暗褐色土 灰白色粘土ブロック若干
- 4 灰褐色土 均質な粘質土、灰白色粘土ブロック少量

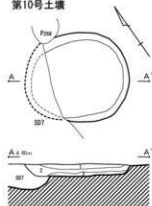
第9号土壤



SK9

- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子・焼土粒子少量
- 2 暗灰褐色土 焼土粒子・炭化物粒子やや多量
- 3 暗灰褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量

第10号土壤



SK10

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 2 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子やや多量
- 3 黄褐色土 黄褐色土主体、焼土粒子・炭化物粒子微量

第28図 土壤 (1)



北東部の一部は調査区域外に延びる。

平面形はピットの連続するような不定形で、規模は長軸長1.18m以上、短軸長0.45m、深さ0.12mである。主軸方位はN-50°-Eを指す。

底面は凹凸が目立つ。掘り込みが浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は第31図2の染付碗、3の播鉢の破片が出土した。

第6号土壌 (第28図)

第6号土壌は、調査区中央部北寄りのD-9グリッドに位置し、第1次調査において検出された。南西部側は調査区域外に延びているため全容は不明である。

平面形は長方形と推定され、規模は長軸長2.91m以上、短軸長1.01m、深さ0.83mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかに外傾して立ち上がる。

遺物は磁器染付碗、陶器香炉・皿・播鉢、焙烙(第31図4~10)等が、底面からやや浮いた状態で出土した。4~6の磁器碗は肥前産で、17世紀後半から18世紀前半の所産である。7の陶器香炉は産地不明。8は肥前産の京焼写しの陶器皿で、見込み部分に榎間山水文の一部が残る。9は瀬戸美濃産の播鉢で、鉄軸が掛かり、卸目を残す。

第7号土壌 (第28図)

第7号土壌は、調査区中央部南寄りのH-7グリッドに位置し、第1次調査において検出された。西端部は調査区域外に延びている。

平面形は楕円形で、規模は長軸長1.14m以上、短軸長0.53m、深さ0.14mである。主軸方位はN-90°を指す。

底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は出土していない。

第8号土壌 (第28図)

第8号土壌は、調査区北西部のC-6グリッドに位置し、第2次調査において検出された。第1

号掘立柱建物跡の北端部に重複しているが、新旧関係については不明である。

平面形は円形で、規模は長軸長1.10m、短軸長1.03m、深さ0.77mである。主軸方位はN-85°-Wを指す。底面は平坦で、壁は僅かに広がりながら直線的に立ち上がる。埋土は4層に分けられ、灰白色粘土や黄褐色土ブロックの混入が目立つ。

遺物は実測図示できなかったが、かわらけ、焙烙の小破片が出土した。

第9号土壌 (第28図)

第9号土壌は、調査区北西部のC-4・5グリッドに位置し、第2次調査において検出された。

平面形はやや隅丸の方形で、規模は長軸長1.66m、短軸長1.26m、深さ0.31mである。主軸方位はN-48°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は大きく3層に分けられ、焼土粒子、炭化物粒子の混入が目立つ。

遺物は磁器碗、陶器碗・播鉢、かわらけ、焙烙などの小破片が出土し、第31図11に陶器碗を図示した。

第10号土壌 (第28図)

第10号土壌は、調査区西部のD-5グリッドに位置し、第2次調査において検出された。調査区北端部から南流してきた第7号溝跡が南東向きを変える屈曲部分に重複し、それを切っている。

平面形は略円形で、規模は長軸長1.65m、短軸長1.40m、深さ0.20mである。主軸方位はN-54°-Wを指す。

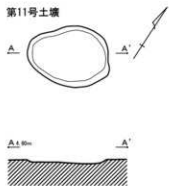
底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は3層に分けられ、焼土粒子、炭化物粒子の混入が目立つ。

遺物は実測図示できなかったが、陶器碗、焙烙などが少量出土した。

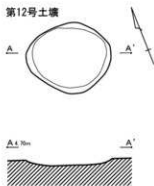
第11号土壌 (第29図)

第11号土壌は、調査区西部のD-5グリッドに

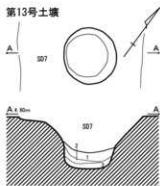
第11号土壤



第12号土壤



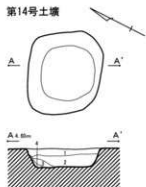
第13号土壤



SK13

- 1 黒褐色土 黄褐色土粒子少量、マンガン結核・鉄斑微量
- 2 黒褐色土 黄褐色土ブロック・黒色土粒子若干、マンガン結核・鉄斑微量
- 3 褐色土 黄褐色土ブロック若干

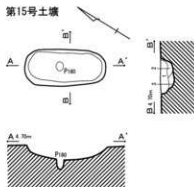
第14号土壤



SK14

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・マンガン結核多量
- 2 黄褐色土 黄褐色土ブロック多量、マンガン結核少量
- 3 暗褐色土 マンガン結核多量、黄褐色土ブロック少量
- 4 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体、マンガン結核少量

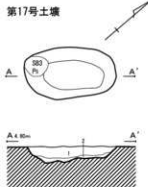
第15号土壤



SK15

- 1 褐色土 黄褐色土粒子微量 しまり弱
- 2 褐色土 マンガン結核・鉄斑多量、黄褐色土粒子微量 しまり弱
- 3 褐色土 黄褐色土ブロック若干 しまり弱

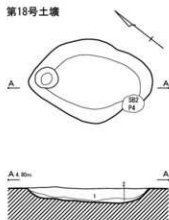
第17号土壤



SK17

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・マンガン結核・鉄斑少量 しまりやや弱
- 2 黄褐色土 黄褐色土ブロック多量、マンガン結核・鉄斑若干 しまりやや弱

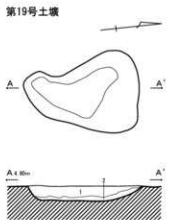
第18号土壤



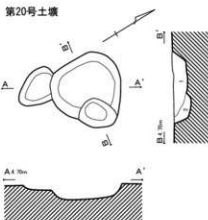
SK18・19

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック・マンガン結核・鉄斑少量
- 2 黄褐色土 黄褐色土ブロック多量、マンガン結核・鉄斑若干

第19号土壤



第20号土壤

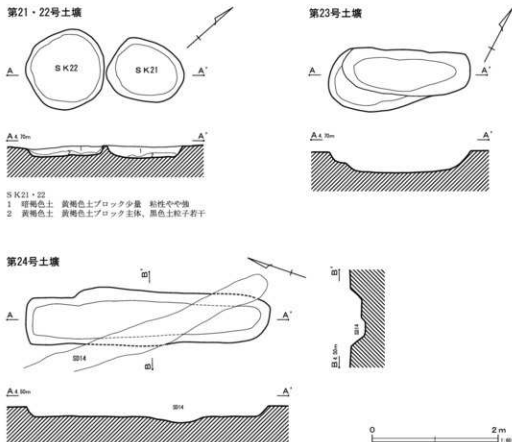


SK20

- 1 暗褐色土 黄褐色土ブロック少量 粘性やや強
- 2 黄褐色土 黄褐色土ブロック主体、黒色土粒子若干

0 2m 1:40

第29図 土壤 (2)



位置し、第2次調査において検出された。

平面形は楕円形で、規模は長軸長1.28m、短軸長0.96m、深さ0.06mである。主軸方位はN-55°-Eを指す。

底面は平坦で、掘り込みは極めて浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は実測図示できなかったが、磁器碗、陶器土瓶、焙烙の小破片が出土した。

第12号土壌 (第29図)

第12号土壌は、調査区西部のD-5グリッドに位置し、第2次調査において検出された。

平面形は楕円形で、規模は長軸長1.34m、短軸長1.13m、深さ0.10mである。主軸方位はN-70°-Wを指す。

底面は概ね平坦で、掘り込みは極めて浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は出土していない。

第13号土壌 (第29図)

第13号土壌は、調査区中央部西寄りのF-6グリッドに位置し、第2次調査において検出された。

第7号溝跡の底面部分を掘り込んだ状態で確認されており、ある程度埋没した段階に掘削されたのであろう。

平面形は円形で、規模は長軸長0.89m、短軸長0.83m、確認面からの深さ0.81mである。主軸方位はN-39°-Wを指す。

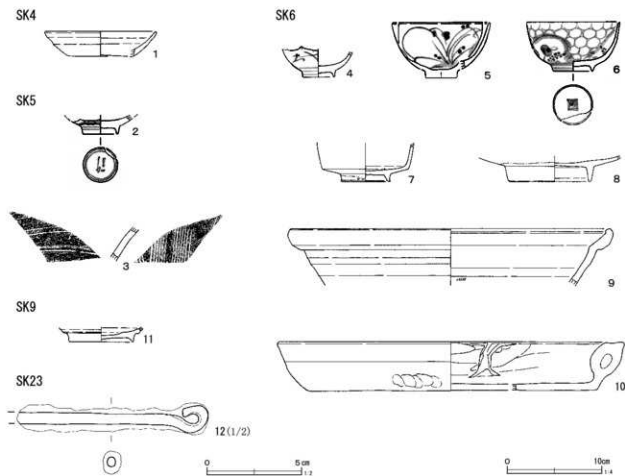
底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。埋土は3層に分けられ、自然堆積を示す。井戸跡の可能性もある。

遺物は出土していない。

第14号土壌 (第29図)

第14号土壌は、調査区西部のE-4グリッドに位置し、第2次調査において検出された。

平面形はやや隅丸の方形で、規模は長軸長1.29



第31図 土城出土遺物

第6表 土城出土遺物観察表

検出番号	遺構番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
第31図1	SK 4	土器	皿	(11.7)	2.6	(6.7)	35	B・F・G・J	不良	黄灰	ロクロ整形 かわらけ
第31図2	SK 5	磁器	碗		[2.0]	3.7	70	A・G	良好	灰白	肥前産「大日月年製」18C 中
第31図3	SK 5	陶器	播鉢					A・G・J	良好	灰白	瀬戸美濃産 鉄軸
第31図4	SK 6	磁器	碗		[3.0]	3.4	60	A・G	良好	灰白	肥前産 高台砂付着 18C 中
第31図5	SK 6	磁器	碗	(10.2)	[4.9]		40	A・G	良好	灰白	肥前産 草花文 18C 中
第31図6	SK 6	磁器	碗	(9.7)	5.3	高台4.1	50	A・G	良好	灰白	肥前産 草花文 17C 後～18C 前
第31図7	SK 6	陶器	香炉		[4.1]	高台5.2	30	A・G	良好	灰白	産地不明 17C 後～18C 前
第31図8	SK 6	陶器	皿		[2.8]	(8.7)	20	A・G	良好	淡黄	肥前産 京焼風 17C 後～18C 前
第31図9	SK 6	陶器	播鉢	(33.8)	[6.1]		20	A・C・G・J	良好	灰黄	瀬戸美濃産 鉄軸 17C 後～18C 前
第31図10	SK 6	土器	焙烙	(36.6)	5.1	(30.6)	25	A・D・F・K	普通	明赤褐	体部外面スス付着 金雲母・赤色粒子
第31図11	SK 9	陶器	碗		[1.6]	(6.7)	45	A・F・G	良好	灰白	瀬戸美濃産 内面灰軸 18C か
第31図12	SK23	鉄製品	棒状	残長: 10.1cm	径: 0.5cm		重さ: 28.9g		一部欠損		端部環状

m、短軸長1.16m、深さ0.29mである。主軸方位はN-63°-Eを指す。

底面は平坦で、壁の立ち上がりは直線的に開いている。埋土は大きく4層に分けられ、黄褐色土ブロックを多量に含むことから埋戻し土と考えられる。

遺物は実測図示できなかったが、土器片が僅かに出土している。

第15号土城 (第29図)

第15号土城は、調査区中央部西寄りのD-6グリッドに位置し、第2次調査において検出された。土城底面の真中に第180号ピットが重複している

が、新旧関係については不明である。

平面形は楕円形で、規模は長軸長1.27m、短軸長0.58m、深さ0.22mである。主軸方位はN-31°-Wを指す。

底面は丸みを帯び、そのまま壁へ続いて緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分けられ、概ね自然堆積を示す。遺物は出土していない。

第17号土壌 (第29図)

第17号土壌は、調査区中央部北寄りのD-7グリッドに位置し、第2次調査において検出された。第3号掘立柱建物跡の南東側梁行のP5と重複しているが、新旧関係については明確でない。

平面形はやや隅丸の長方形で、規模は長軸長1.46m、短軸長0.81m、深さ0.25mである。主軸方位はN-45°-Eを指す。

底面は凹凸が目立ち、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられ、下層には黄褐色土ブロックが多量に含まれていた。遺物は出土していない。

第18号土壌 (第29図)

第18号土壌は、調査区中央部北寄りのD-7・8グリッドに位置し、第2次調査において検出された。第2号掘立柱建物跡の東側桁行のP4と重複しているが、新旧関係については不明である。

平面形はやや不整な楕円形で、規模は長軸長1.94m、短軸長1.33m、深さ0.22mである。主軸方位はN-40°-Wを指す。

底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられ、下層には黄褐色土ブロックが多量に含まれていた。遺物は出土していない。

第19号土壌 (第29図)

第19号土壌は、調査区中央部北寄りのD-8グリッドに位置しており、第2次調査において検出された。

平面形は不定形で、規模は長軸長1.82m、短軸長1.30m、深さ0.24mである。主軸方位はN-

11°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられ、下層には黄褐色土ブロックが多量に含まれていた。

遺物は実測図示できなかったが、土器片が僅かに出土している。

第20号土壌 (第29図)

第20号土壌は、調査区中央部のE-7グリッドに位置し、第2次調査において検出された。

平面形はビツの連結したような不定形で、規模は長軸長1.60m、短軸長1.19m、深さ0.27mである。主軸方位はN-31°-Eを指す。

底面は段差をもち、壁の立ち上がりはやや直線的である。埋土は大きく2層に分けられ、下層は黄褐色土ブロックを主体とする。遺物は出土していない。

第21号土壌 (第30図)

第21号土壌は、調査区中央部のE-7グリッドに位置し、第2次調査において検出された。南西側に同規模同大の第22号土壌が並ぶ。

平面形は楕円形で、規模は長軸長1.15m、短軸長0.95m、深さ0.18mである。主軸方位はN-65°-Eを指す。

底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられ、下層は黄褐色土ブロックを主体とする。

遺物は出土していない。

第22号土壌 (第30図)

第22号土壌は、調査区中央部のE-7グリッドに位置し、第2次調査において検出された。第21号土壌が北東側に隣接している。

平面形は円形で、規模は長軸長1.29m、短軸長1.23m、深さ0.14mである。主軸方位はN-0°を指す。

底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分けられ、下層は黄褐色土ブロックを主体とする。遺物は出土していない。

第23号土壌 (第30図)

第23号土壌は、調査区中央部南寄りのG-7グリッドに位置しており、第2次調査において検出された。

平面形は楕円形の土壌が重複したような不定形で、規模は長軸長2.24m、短軸長1.02m、深さ0.34mである。主軸方位はN-60°-Eを指す。

底面には段差が認められるが概ね平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

遺物は近代(明治期)と考えられる陶磁器、焙烙、瓦の小破片とともに第31図12の鉄製品が出土した。

12は棒状鉄製品である。一方の端部を欠損するため全容は不明であるが、残存する端部は環状に

曲げられていることがX線透過撮影で判明した。形状は轡の銜先金具に類似しているが、用途・性格は不明である。

第24号土壌 (第30図)

第24号土壌は、調査区南西部のH-6グリッドに位置し、第2次調査において検出された。第14号溝跡が斜めに重複しているが、新旧関係については不明である。

平面形は細長い長方形に近い不定形で、規模は長軸長3.82m、短軸長0.85m、深さ0.16mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

底面は多少凹凸があり、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

遺物は出土していない。

第7表 土壌一覧表

番号	グリッド	平面形	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	調査次	重複遺構	遺物	挿図
1	G-8-9	不定形	N- 80°-E	2.55	1.21	0.27	第1次			第28図
2	C-8	不定形	N- 44°-E	1.06	0.52	0.50	第1次		かわらけ 砥石	第28図
3	C-8	不定形	N- 87°-E	0.98	0.50	0.50	第1次		土師器 火鉢	第28図
4	C-7	略円形	N- 67°-W	1.38	(1.06)	0.30	第1次		かわらけ 焙烙 組器	第28図
5	C-7	不定形	N- 50°-E	(1.18)	0.45	0.12	第1次		染付陶 漆鉢	第28図
6	D-9	長方形	N- 60°-E	(2.91)	1.01	0.83	第1次		陶磁器 焙烙	第28図
7	H-7	楕円形	N- 90°	(1.14)	0.53	0.14	第1次			第28図
8	C-6	円形	N- 85°-W	1.10	1.03	0.77	第2次	SBI	かわらけ 焙烙	第28図
9	C-4-5	方形	N- 48°-E	1.66	1.26	0.31	第2次		かわらけ 陶磁器	第28図
10	D-5	略円形	N- 54°-W	1.65	1.40	0.20	第2次	SD7より新	陶器 焙烙	第28図
11	D-5	楕円形	N- 55°-E	1.28	0.96	0.06	第2次		陶磁器 焙烙	第29図
12	D-5	楕円形	N- 70°-W	1.34	1.13	0.10	第2次			第29図
13	F-6	円形	N- 39°-W	0.89	0.83	0.81	第2次	SD7より古		第29図
14	E-4	方形	N- 63°-E	1.29	1.16	0.29	第2次		土器	第29図
15	D-6	楕円形	N- 31°-W	1.27	0.58	0.22	第2次	P180		第29図
16	D-8	楕円形	N- 36°-E	1.72	0.65	0.10	第2次		ロクロ土師器 砥石	第29図
17	D-7	長方形	N- 45°-E	1.46	0.81	0.25	第2次	SB3-P5		第29図
18	D-7-8	楕円形	N- 40°-W	1.94	1.33	0.22	第2次	SB2-P4		第29図
19	D-8	不定形	N- 11°-E	1.82	1.30	0.24	第2次		土器	第29図
20	E-7	不定形	N- 31°-E	1.60	1.19	0.27	第2次			第29図
21	E-7	楕円形	N- 65°-E	1.15	0.95	0.18	第2次			第30図
22	E-7	円形	N- 0°	1.29	1.23	0.14	第2次			第30図
23	G-7	不定形	N- 60°-E	2.24	1.02	0.34	第2次		陶磁器 瓦 鉄製品	第30図
24	H-6	不定形	N- 19°-W	3.82	0.85	0.16	第2次	SD14		第30図

(6) ビット

ビットは合計412基の多くを数え、調査区全域から検出されている。ビット番号は調査区全体を通して連番とし、新たに掘立柱建物跡や柵列に編入されたものや調査時の欠番については整理段階で新番を付して、ビット区割図(第34～39図)に記載した。また、規模等のデータに関しては第8表のビット一覧表に示した。

ビットの平面形態は、円形もしくは楕円形のものが主体を占めている。規模は直径0.11～0.90m、深さ0.03～0.59mと一様でなく、埋土に柱痕の確認されたものは少ない(第40・41図)。

分布状況は、調査区中央部北寄りのD-7、E-7・8グリッド周辺、調査区西部のD-4・5グリッド周辺、調査区東部のF-9・10グリッド周辺に集中する傾向が窺われた。掘立柱建物跡や柵列としたもの以外には、配列や埋土の状態に規則性の認められるものはなかった。

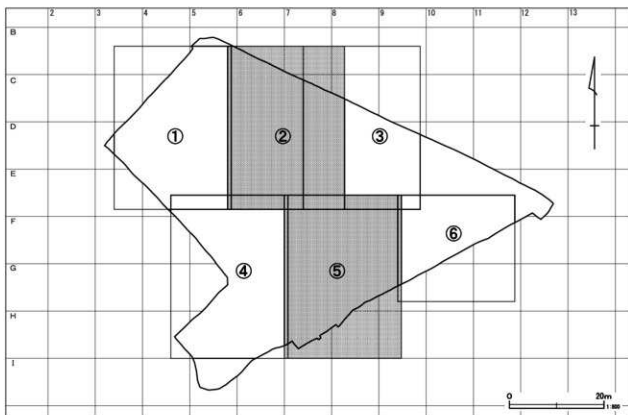
出土遺物は極めて少なく時期を判定することは難しいが、埋土の状態などから近世・近代を中心とするものが大半を占めていると推定される。

ビット出土遺物(第32図)

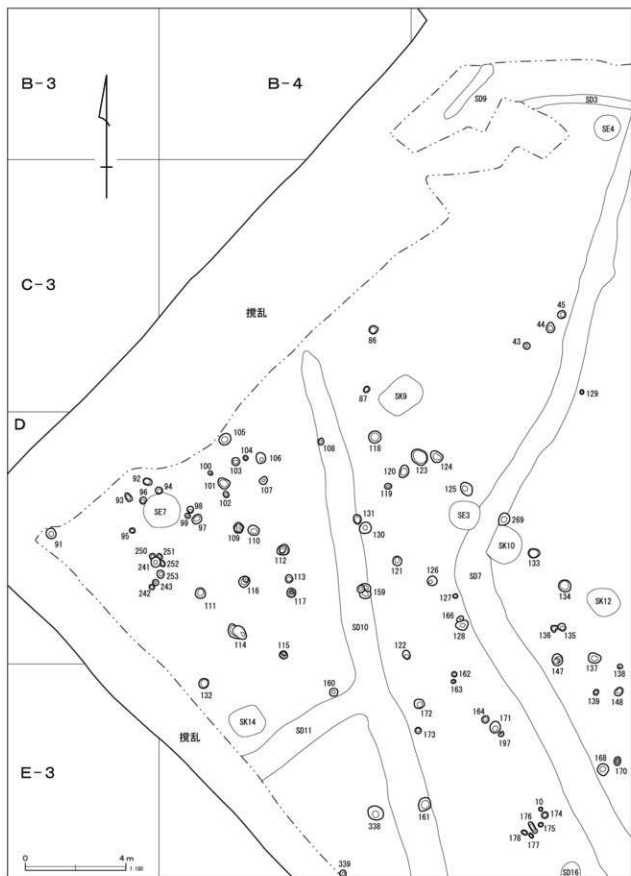
遺物はほとんどのビットから出土していないが、中には埋土から陶磁器、かわらけ、焙烙等の小破片を出土したものがあつた。調査区中央部北寄りのC-8グリッドに位置する第82号ビットからは、煙管雁首の火皿を打ち潰したいわゆる雁首銭(第32図1)が出土した。雁首銭は長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.2cmで、重さ0.5gの銅製である。緑青に覆われ脆弱なため、残りは良くない。



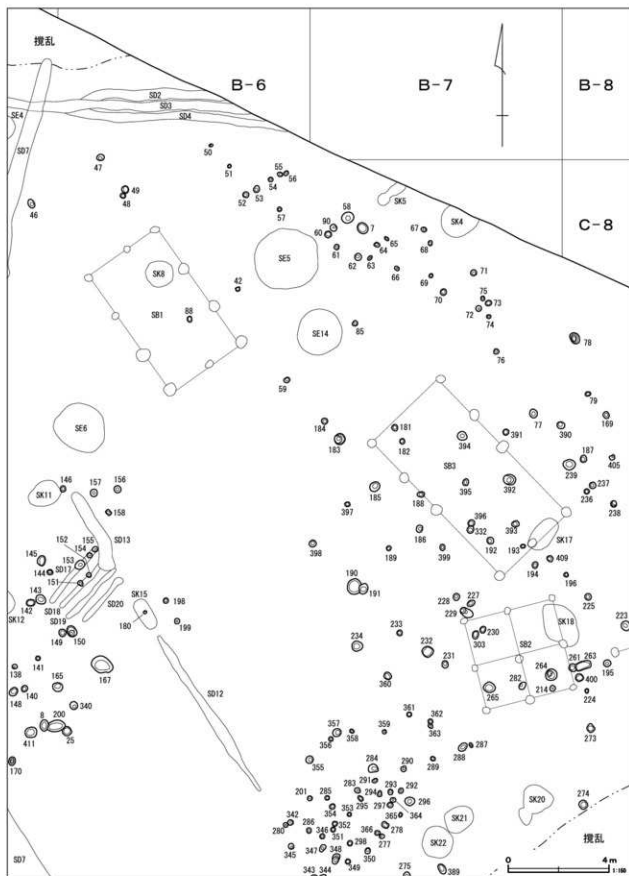
第32図 ビット出土遺物



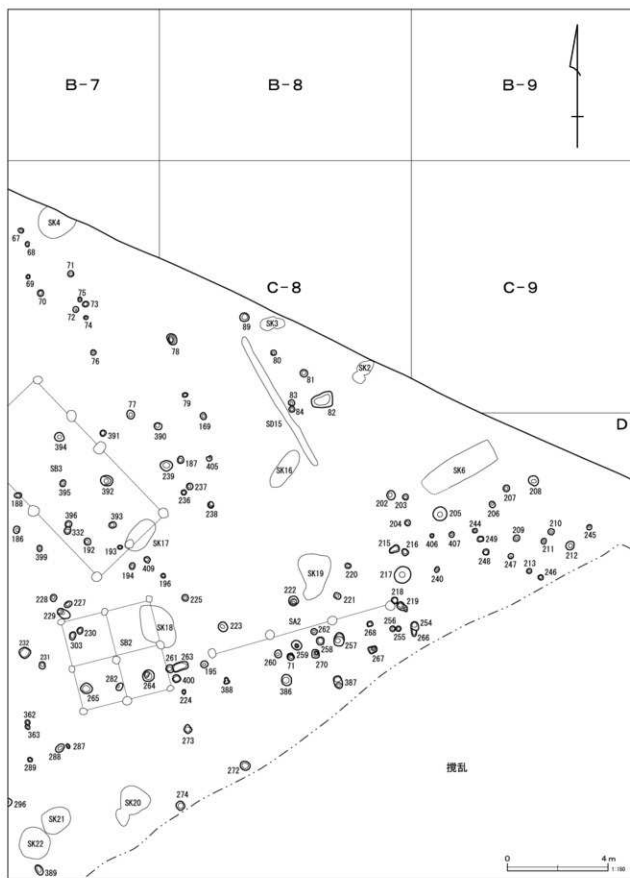
第33図 ビット全体図区割り図



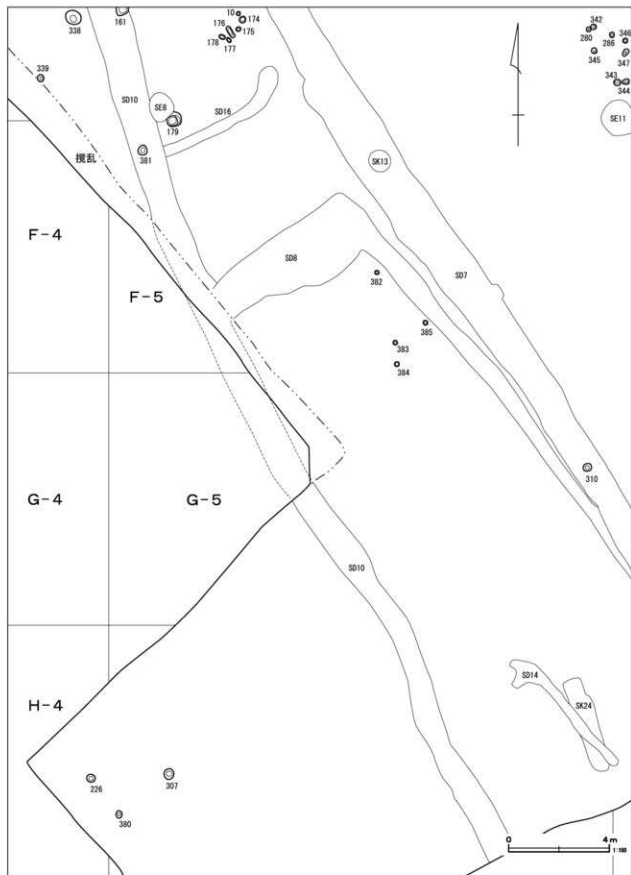
第34図 ピット全体図(1)



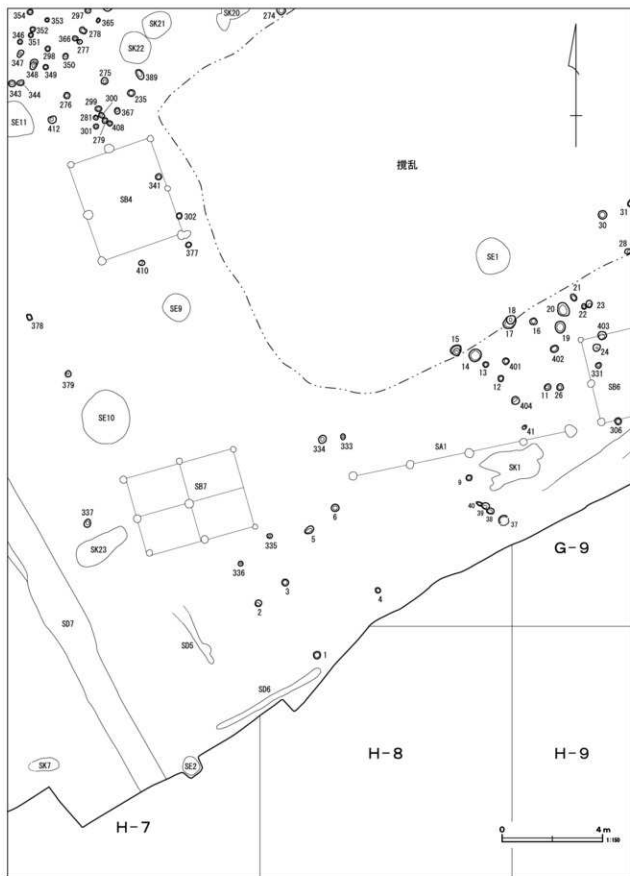
第35図 ビット全体図(2)



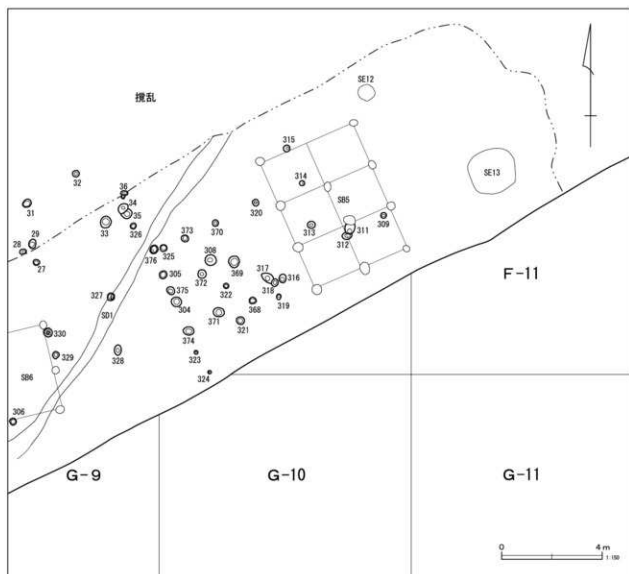
第36図 ピット全体図 (3)



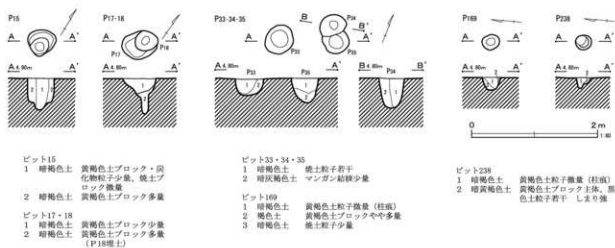
第37図 ピット全体図(4)



第38図 ビット全体図 (5)



第39図 ビット全体図(6)



第40図 ビット(1)

第8表 ビット一覧表

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他	番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P1	H-8	30	28	22	1次	P53	C-6	27	24	15	
P2	G-7	27	25	17	1次	P54	C-6	19	18	12	
P3	G-8	28	26	10	1次	P55	C-6	22	18	19	
P4	G-8	23	20	8	1次	P56	C-6	21	19	12	
P5	G-8	39	25	28	1次	P57	C-6	18	18	13	
P6	G-8	30	30	11	1次 木片	P58	C-7	50	43	22	
P7	C-7	46	39	10		P59	C-6	25	22	10	
P8	E-5	45	34	20	P200	P60	C-7	27	25	26	
P9	G-8	24	23	18	1次 陶器	P61	C-7	21	20	7	
P10	E-5	18	16	7		P62	C-7	27	26	10	
P11	G-9	28	26	10	1次	P63	C-7	22	14	12	
P12	G-8	25	22	14	1次	P64	C-7	24	18	15	
P13	F-8	23	23	7	1次	P65	C-7	21	12	9	
P14	F-8	50	48	11	1次	P66	C-7	20	14	10	
P15	F-8	44	43	49	1次	P67	C-7	23	19	15	
P16	F-9	30	26	9	1次	P68	C-7	20	16	7	
P17	F-8	(55)	43	(57)	1次 P18	P69	C-7	16	15	5	
P18	F-8	33	33	56	1次 P17	P70	C-7	25	24	15	
P19	F-9	46	40	9	1次	P71	C-7	24	23	9	
P20	F-9	56	45	18	1次	P72	C-7	22	22	12	
P21	F-9	30	22	11	1次	P73	C-7	26	25	12	
P22	F-9	22	18	8	1次	P74	C-7	18	15	6	
P23	F-9	30	25	29	1次	P75	C-7	18	15	10	
P24	F-9	31	28	38	1次	P76	C-7	21	20	9	
P25	E-6	37	36	8		P77	D-7	32	30	33	
P26	G-9	27	26	15	1次	P78	C-8	47	35	15	
P27	F-9	26	24	10	1次	P79	C-8	22	17	10	
P28	F-9	26	19	12	1次	P80	C-8	21	20	9	
P29	F-9	38	27	38	1次	P81	C-8	30	29	13	
P30	F-9	34	34	13	1次	P82	C-8	84	60	32	銅製品(権首銭)
P31	F-9	34	32	16	1次 平瓦	P83	C-8	26	24	9	
P32	F-9	28	25	21	1次	P84	C-8	24	24	9	
P33	F-9	44	44	23	1次	P85	C-7	22	21	15	
P34	F-9	40	32	45	1次 P35	P86	C-4	38	34	18	青磁
P35	F-9	43	(31)	39	1次 P34	P87	C-4	26	21	15	
P36	F-9	34	29	14	1次	P88	C-6	24	18	13	SB1
P37	G-8	41	(21)	3	1次	P89	C-8	37	34	12	1次
P38	G-8	29	24	10	1次	P90	C-7	28	27	15	
P39	G-8	31	26	18	1次 P40	P91	D-3	41	40	28	
P40	G-8	(26)	15	22	1次 P39	P92	D-3	35	27	20	
P41	G-9	20	14	5	1次	P93	D-3	37	22	8	
P42	C-6	21	21	12		P94	D-3	28	(25)	11	SE7
P43	C-5	27	26	23		P95	D-3	22	20	7	
P44	C-5	41	34	22		P96	D-3	27	26	10	SE7
P45	C-5	31	31	23		P97	D-4	40	37	31	
P46	C-5	37	24	20		P98	D-4	27	26	24	
P47	B-6	31	25	20		P99	D-4	23	21	6	
P48	C-6	22	19	6		P100	D-4	19	16	9	
P49	C-6	29	27	12		P101	D-4	48	40	12	土器
P50	B-6	16	11	7		P102	D-4	25	23	8	
P51	C-6	15	14	11		P103	D-4	30	29	19	
P52	C-6	24	23	16		P104	D-4	20	18	10	

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P105	D-4	50	44	15	
P106	D-4	40	36	24	
P107	D-4	33	30	12	
P108	D-4	27	23	7	SD10
P109	D-4	43	40	36	土器
P110	D-4	45	39	16	
P111	D-4	41	39	17	かわらけ
P112	D-4	48	42	55	
P113	D-4	32	29	14	
P114	D-4	83	57	43	
P115	D-4	33	32	33	
P116	D-4	44	39	24	
P117	D-4	37	35	21	
P118	D-4	48	47	9	
P119	D-4	28	22	9	
P120	D-4	49	34	16	
P121	D-4	37	36	23	土器
P122	D-4	37	29	45	
P123	D-5	70	60	10	かわらけ
P124	D-5	52	41	20	
P125	D-5	58	44	24	
P126	D-5	38	37	36	焙烙
P127	D-5	19	16	4	
P128	D-5	50	(36)	27	P166 土器
P129	C-5	18	16	10	
P130	D-4	48	44	20	
P131	D-4	33	30	28	SD10
P132	E-4	41	37	16	
P133	D-5	47	36	31	
P134	D-5	48	45	33	
P135	D-5	33	28	8	
P136	D-5	30	24	8	
P137	D-5	50	40	23	
P138	D-5	20	18	20	
P139	E-5	25	21	7	
P140	E-5	25	25	9	
P141	D-5	20	18	9	
P142	D-5	33	27	9	
P143	D-5	42	34	14	
P144	D-5	24	19	7	
P145	D-5	40	31	13	
P146	D-6	25	22	14	
P147	D-5	48	40	36	
P148	E-5	37	30	8	
P149	D-6	29	27	11	
P150	D-6	45	35	17	
P151	D-6	24	19	7	SD18
P152	D-6	20	18	7	SD18
P153	D-6	40	32	11	SD17
P154	D-6	22	19	9	SD17
P155	D-6	21	21	5	SD17
P156	D-6	29	28	6	

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P157	D-6	30	27	9	
P158	D-6	24	18	6	
P159	D-4	62	56	50	SD10
P160	E-4	35	32	15	
P161	E-5	58	49	52	SD10
P162	E-5	21	21	9	
P163	E-5	18	15	15	
P164	E-5	31	30	11	
P165	E-5	42	35	9	
P166	D-5	30	19	21	土器
P167	D-6	90	64	24	
P168	E-5	46	44	39	
P169	D-8	28	25	19	
P170	E-5	35	27	25	
P171	E-5	48	41	41	
P172	E-5	42	38	38	
P173	E-5	25	25	22	
P174	E-5	28	26	9	
P175	E-5	21	18	7	
P176	E-5	51	19	8	
P177	E-5	24	14	5	
P178	E-5	26	18	8	
P179	E-5	62	(53)	59	SE 8
P180	D-6	15	12	(37)	SK15
P181	D-7	26	24	10	SB 3
P182	D-7	22	20	12	SB 3
P183	D-7	44	44	28	
P184	D-7	24	24	10	
P185	D-7	42	35	39	
P186	D-7	28	25	42	
P187	D-8	30	25	11	
P188	D-7	28	21	17	SB 3
P189	D-7	19	19	13	
P190	D-7	63	(47)	15	P191
P191	D-7	42	35	38	
P192	D-7	28	26	26	SB 3 土器
P193	D-7	20	16	8	SB 3
P194	D-7	26	22	12	
P195	E-8	30	29	24	
P196	D-8	19	17	9	
P197	E-5	24	18	6	
P198	D-6	21	21	6	
P199	D-6	22	20	6	
P200	E-5	74	44	21	P 8
P201	E-7	20	19	17	木片
P202	D-8	36	34	22	
P203	D-8	23	22	11	
P204	D-8	23	23	27	
P205	D-9	56	54	24	
P206	D-9	25	24	43	
P207	D-9	25	25	20	
P208	D-9	43	40	19	

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P209	D-9	26	24	27	
P210	D-9	26	24	22	
P211	D-9	21	20	14	
P212	D-9	35	32	8	
P213	D-9	20	19	24	
P214	E-7	24	23	21	
P215	D-8	41	24	15	
P216	D-8	27	24	17	
P217	D-8	66	65	29	
P218	D-8	27	24	16	
P219	D-8	49	47	37	土器
P220	D-8	25	23	13	
P221	D-8	29	22	9	
P222	D-8	40	39	40	
P223	D-8	38	36	22	
P224	E-8	18	15	18	
P225	D-8	27	25	18	
P226	H-4	34	31	23	鉄片
P227	D-7	33	22	11	
P228	D-7	28	26	13	
P229	D-7	55	35	43	
P230	D-7	28	23	12	SB 2
P231	D-7	33	25	10	
P232	D-7	46	44	54	
P233	D-7	22	21	21	
P234	D-7	44	41	23	
P235	E-7	29	27	21	
P236	D-8	21	20	13	
P237	D-8	26	26	12	
P238	D-8	24	23	17	
P239	D-8	49	47	32	
P240	D-9	23	20	25	土器
P241	D-3	40	38	22	P250・251・252
P242	D-3	21	20	10	
P243	D-3	25	23	10	
P244	D-9	20	17	24	
P245	D-9	20	19	12	
P246	D-9	22	21	13	
P247	D-9	20	19	22	
P248	D-9	24	23	41	
P249	D-9	26	21	27	
P250	D-3	24	(18)	9	P241
P251	D-3	23	(18)	11	P241
P252	D-3	27	21	7	P241
P253	D-3	30	29	11	
P254	D-8	37	30	39	P266
P255	D-8	22	19	12	
P256	D-8	22	22	9	
P257	D-8	52	40	44	陶器
P258	D-8	31	30	8	
P259	D-8	40	37	52	
P260	D-8	30	28	19	

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P261	E-8	33	26	22	P263
P262	D-8	25	25	11	
P263	E-8	(64)	37	11	P261
P264	E-7	47	44	33	SB 3
P265	E-7	49	42	24	SB 3
P266	D-8	(26)	21	(21)	P254
P267	D-8	35	26	32	
P268	D-8	23	19	21	
P269	D-5	55	43	36	SD 7
P270	D-8	33	29	36	
P271	D-8	29	27	16	
P272	E-8	40	36	27	
P273	E-8	36	32	24	
P274	E-8	37	35	36	
P275	E-7	30	26	18	
P276	E-7	26	26	17	
P277	E-7	21	19	16	
P278	E-7	30	24	14	
P279	E-7	24	21	9	
P280	E-6	19	18	7	
P281	E-7	19	18	8	
P282	E-7	32	24	24	SB 3
P283	E-7	25	23	13	
P284	E-7	39	34	25	
P285	E-7	20	18	19	
P286	E-6	23	19	16	
P287	E-7	21	13	8	
P288	E-7	39	27	16	
P289	E-7	19	18	9	
P290	E-7	23	22	16	
P291	E-7	23	18	18	
P292	E-7	23	19	11	
P293	E-7	23	20	12	
P294	E-7	25	17	12	
P295	E-7	27	17	11	
P296	E-7	40	35	42	
P297	E-7	25	22	16	
P298	E-7	23	22	15	
P299	E-7	26	21	14	
P300	E-7	24	19	14	
P301	F-7	21	20	9	
P302	F-7	25	22	13	土器
P303	D-7	32	24	30	SB 2
P304	F-10	41	39	17	
P305	F-10	33	29	20	
P306	G-9	28	26	11	SB 6
P307	H-5	44	40	12	土器
P308	F-10	45	42	31	土器
P309	F-10	24	23	17	SB 5 土器
P310	G-6	35	32	10	SD 7
P311	F-10	(35)	41	30	SB 5 P312
P312	F-10	41	(27)	16	SB 5 P311

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P313	F-10	32	28	12	SB 5
P314	F-10	20	20	37	SB 5
P315	F-10	27	26	25	
P316	F-10	36	28	27	
P317	F-10	(50)	34	26	P318
P318	F-10	31	25	20	P317
P319	F-10	22	17	14	
P320	F-10	18	17	24	
P321	F-10	32	32	14	
P322	F-10	23	22	12	
P323	F-10	16	15	26	
P324	G-10	14	14	13	
P325	F-10	28	25	17	
P326	F-9	26	23	9	
P327	F-9	31	29	28	SD 1
P328	F-9	42	38	14	
P329	F-9	30	27	29	
P330	E-7	31	28	43	
P331	F-9	25	21	9	
P332	D-7	(28)	26	25	SB 3 P396
P333	G-8	24	18	14	
P334	G-8	32	30	29	
P335	G-8	23	20	9	
P336	G-7	19	18	8	
P337	G-7	34	26	11	
P338	E-4	65	59	12	
P339	E-4	28	25	24	
P340	E-6	32	29	10	
P341	F-7	27	24	10	SB 4 土器
P342	E-6	22	22	18	
P343	E-7	27	24	15	
P344	E-7	30	22	20	
P345	E-6	23	22	15	
P346	E-7	22	21	13	
P347	E-7	32	20	14	
P348	E-7	43	28	21	
P349	E-7	21	20	13	
P350	E-7	25	21	12	
P351	E-7	22	20	10	
P352	E-7	22	21	11	
P353	E-7	18	18	9	
P354	E-7	24	21	6	
P355	E-7	30	28	20	
P356	E-7	19	18	15	
P357	E-7	35	31	18	
P358	E-7	18	14	13	
P359	E-7	18	18	16	
P360	E-7	33	25	19	
P361	E-7	20	20	9	
P362	E-7	20	(18)	12	P363

番号	グリッド	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	重複・遺物他
P363	E-7	22	17	13	P362
P364	E-7	22	18	14	
P365	E-7	20	15	10	
P366	E-7	22	21	16	
P367	E-7	25	21	10	
P368	F-10	30	26	14	
P369	F-10	46	42	19	
P370	F-10	27	24	16	
P371	F-10	44	36	23	
P372	F-10	33	33	32	
P373	F-10	30	27	28	
P374	F-10	44	34	29	
P375	F-10	34	29	16	
P376	F-9	36	31	25	
P377	F-7	24	21	13	
P378	F-7	25	18	24	
P379	F-7	26	23	19	
P380	H-5	30	25	16	
P381	F-5	(40)	(37)	(36)	SD10
P382	F-6	17	16	9	
P383	F-6	20	18	7	
P384	F-6	19	19	6	
P385	F-6	20	18	7	
P386	E-8	45	40	15	
P387	E-8	51	33	30	
P388	E-8	26	22	9	
P389	E-7	44	27	30	
P390	D-7	30	27	32	
P391	D-7	24	24	19	
P392	D-7	48	45	50	SB 3
P393	D-7	29	24	15	SB 3
P394	D-7	38	34	21	SB 3
P395	D-7	26	22	10	SB 3
P396	D-7	(26)	26	25	SB 3 P332
P397	D-7	23	21	24	
P398	D-7	28	28	35	
P399	D-7	25	19	10	
P400	E-8	34	30	20	
P401	F-8	27	27	14	1次
P402	F-9	33	27	16	1次
P403	F-9	22	21	15	
P404	G-9	32	32	24	1次
P405	D-8	25	21	19	
P406	D-9	16	15	11	
P407	D-9	24	21	27	
P408	F-7	23	22	10	
P409	D-7	25	24	10	
P410	F-7	25	21	36	
P411	E-5	47	38	40	
P412	E-7	31	28	43	

(7) その他の遺物

第42図に平成15年度に実施された試掘調査の遺物(1~3)と、第1次調査A区の遺構外出土遺物(4~7)を一括した。なお、試掘調査における遺物は、事業地内から出土したものであるが、明確な出土地点や状況については不明である。

1・2は須恵器環の底部破片である。底部回転糸切り離し未調整で、1は底部から直線的に外傾して立ち上がり、2は湾曲して立ち上がる。胎土に白色針状物質を含むことから、南比企窯産であることが分かる。時期は9~10世紀に位置づけられる。試掘15トレンチからの出土である。

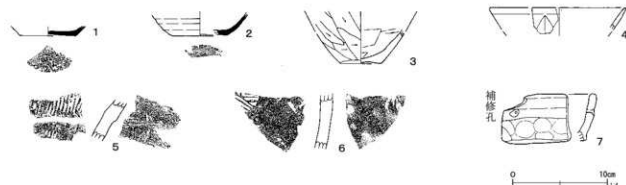
3も同じく試掘調査で出土した土師器の武蔵型甕の底部破片である。胴部外面は斜め方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデを施す。須恵器

環に近い年代であろう。

4は龍泉窯系の青磁鎚蓮弁文碗である。弁の先端が剣頭状でヘラによる片切削りのB-1式に位置づけられる。小破片のため口径は不定である。13世紀前半に比定される。第1次調査A区出土。

5・6は陶器甕の胴部破片である。5は外面に平行叩き目風の刻印、6は刻印の一部が認められる。第1次調査A区出土。

7は焙烙の口縁部の破片である。口縁部中に補修孔が1個、外側から穿孔されている。口縁部はヨコナデを施し、体部外面には指頭瓦痕を残す。外面にはスガが僅かに付着している。胎土は角閃石粒子の混入が目立ち、砂っぽいものである。第1次調査A区出土。



第42図 その他の出土遺物

第9表 その他の出土遺物観察表

種別番号	遺構番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
第42図1	試掘	須恵器	環		[1.0]	(5.8)	50	A・G・H・J	良好	青灰	回転糸切り離し 南比企窯産 9C前
第42図2	試掘	須恵器	環		[2.5]	(5.8)	30	A・F・G・H・J	良好	灰	回転糸切り離し 南比企窯産 9C前
第42図3	試掘	土師器	甕		[5.6]	(4.4)	45	A・B・F・G・J	良好	鈍い橙	武蔵型甕 底面ヘラケズリ 9C
第42図4	A区	青磁	碗	(14.4)	[2.5]		10	A・G	良好	灰白	龍泉窯系鎚蓮弁文碗 (B-1式) 13C前
第42図5	A区	陶器	甕				破片	A・G・J	良好	灰白	外面刻印
第42図6	A区	陶器	甕				破片	A・G・J	良好	灰白	外面刻印 内面平滑
第42図7	A区	土器	焙烙		4.9		破片	A・B・F・G・J	普通	鈍い黄橙	成型技法: 型 外面スガ付着 補修孔

2. 第1次調査B区

第1次調査B区は、A区の南へ約70m離れた位置に所在する。周辺の水田面よりも一段高い部分で標高は約4.9mである。長さ約32m、幅約5.5mの狭長な調査区である。

調査の結果、調査区を横断するように平行して走る溝跡が3条検出された。幅1m前後、深さ10cm程の溝跡で、埋土は暗褐色土を主体とする。土層断面の観察では、現代の盛土のすぐ下から掘り込まれていた。遺物がなく、時期不詳である。また、調査区内には溝跡と同一方向に伸びる現代の暗渠が4条確認された。

第1号溝跡（第43図）

第1号溝跡は、調査区の北東端部のO-9・10、P-10グリッドに位置する。

規模は幅0.75～0.98m、確認面からの深さ0.16mで、直線的に伸びる。南西に約3.0m隔てて第2号溝跡が並走する。

第2号溝跡（第43図）

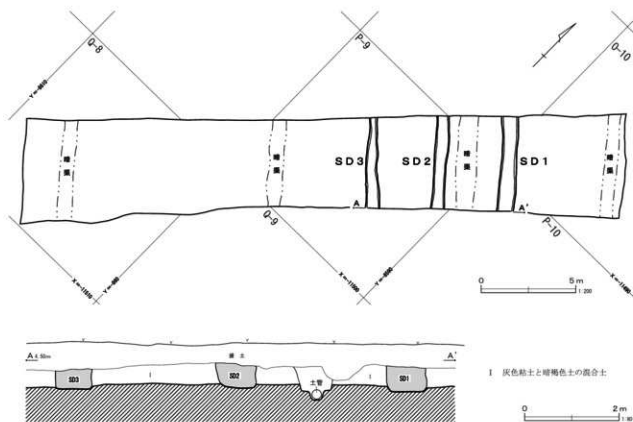
第2号溝跡は、調査区の北東寄りのP-9グリッドに位置する。規模は幅0.60～0.71m、確認面からの深さ0.08mで直線的に伸びる。南西側約3.0mに第3号溝跡が並走する。

第3号溝跡（第43図）

第3号溝跡は、調査区の中央部のP-9グリッドに位置する。規模は幅0.35～0.70m、確認面からの深さ0.06mで、北西端部で幅を狭める。

このようにB区では時期不詳の溝跡が検出されただけで、隣接地における遺構・遺物の分布も希薄であると思われる。

なお、調査区を横断する現代の暗渠は、二段掘りした真中に陶製の土管を埋設したものである。掘方の底面にはマツの樹皮とアシが敷き詰められ、その上に土管を置き、さらに上面も同様に樹皮などで被覆した手の込んだものであった。



第43図 第1次調査B区全体図・溝跡土層断面

V 調査のまとめ

1. 中・近世の様相

ここでは鈞上礎遺跡第1次調査A区・第2次調査の主体となった中・近世の遺構と遺物の特徴についてまとめることにする。

今回の調査において検出された中・近世の遺構は、掘立柱建物跡7棟、柵列2条、溝跡18条、井戸跡14基、土壇24基、ピット412基である。このうち掘立柱建物跡は、等高線に沿って自然堤防の縁辺をめぐる第10号溝跡と、それに合流する鍵の手状に折れ曲がる第8号溝跡に区画された自然堤防の高まりを中心に展開していた(第4図)。残念ながら、建物群を南北に分断するように大きな擾乱が入るため、建物群の全容を把握することはできなかった。

このような制約はあるものの建物跡の方向性や柵列などの組み合わせに着目して群構成を復元すると、第1号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡の2棟は概ね軸を描いて配置されている。建物規模からすると居住施設の可能性が高い。これに方向性は一致していないが、倉庫的な機能の第2号掘立柱建物跡が伴う可能性も考えられよう。また、残りの4棟についても主軸の方向性や柵列との組み合わせから、方形ないしL字形の配置を採っていた可能性がない訳ではないが、自ずと限界がある。しかし、建物の規模や方向性から見て、全体として2ないし3段階の変遷過程を想定することは許されよう。ただし、年代的な根拠となり得る遺物が、僅かに第5号掘立柱建物跡から出土した捏鉢しかないため、決め手を欠く。また、明確な遺構の切り合いもなく、時期差を検証することさえ難しいのが実状である。

そこで、遺物を比較的多く出土している井戸跡から建物群の年代を探ることにしよう。

既に指摘したように井戸跡は、往々にして建物跡の傍らに付属する傾向にある。例外的に第7号

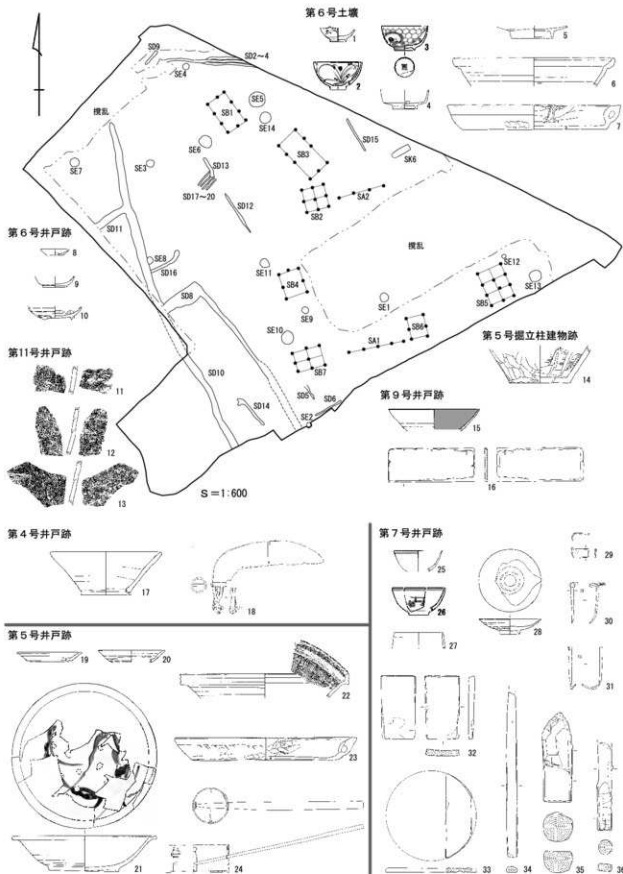
井戸跡のみが調査区西端の区画溝外側に位置し、杭・板材・角材等の多量の建築部材が一括廃棄され、意図的に埋め戻されていた。肥前産の染付碗や青緑釉輪髹皿などの18世紀前半を中心とする土器を伴う。

井戸跡は素掘りのものを主体とするが、第11号井戸跡のように曲物と想定される井戸側を底面に設置した例や、第14号井戸跡のように江戸遺跡に多く見られる結桶を使用した井戸側が想定されるなど、多様なあり方を示している。

出土遺物は、第5号井戸跡からほぼ完形の曲物柄杓が出土しているほか、第4号井戸跡から鉄鎌、第11号井戸跡から刻印をもつ丹波産の甕が出土しており注目される。また、胎土に金雲母粒子を多量に含む土師質平底焙烙が、第5号井戸跡、第6号土壇等から出土している。これらは胎土の特徴から常陸方面で生産されたものと指摘されており、県内では東部地域を中心に分布し、舟運を利用した流通が想定される。

陶磁器類の多くは17世紀後半から18世紀前半のものであり、遺構の大半が近世段階の所産であることを示す。しかし、グリッド出土遺物の中には13世紀前半の青磁鎚蓮弁文碗なども含まれており、中世に遡る遺構の存在も視野に入れておくべきであろう。

今回の調査によって江戸時代中期の屋敷跡の一端が明らかにされた。十分な空間構成を読み解くまでには至らなかったが、掘立柱建物跡と井戸跡との有機的な関連性、結桶など井戸側構造に見られる江戸遺跡との共通性、肥前産陶磁器を補完する瀬戸美濃産・丹波産陶器の流通と消費、焙烙などの在地産土器や多様な木製品のあり方など、江戸を取り巻く近郊農村の実態を垣間見ることができよう。



第44図 中・近世の主な遺構と出土遺物

2. ロクロ土師器について

釣上碗遺跡の位置する埼玉県南東部は、平安時代において須恵器が供膳器の中心となる県北西部や県中央部とは異なった、ロクロ土師器を主体とする地域である。その背景には中川低地を挟み下総台地と対峙する地理的特性が影響し、独自性の強い非北武蔵系土器分布圏を形成している（渡辺1986、田中2003）。

ここでは第16号土塚から出土したロクロ土師器の坏・埴類（第45図1・2）について、大宮台地東部と周辺自然堤防の平安時代遺跡出土のロクロ土師器との比較検討を通して、その編年的な位置づけを明らかにしたい。

まず、第16号土塚から出土したロクロ土師器の特徴について列挙すると、①体部の形態及び法量はほぼ同じ深身形態であるが、無台と有高台の2形態が見られる。②器壁が薄く、軽量に仕上げられる。③体部内面及び口縁部外面の一部が黒色処理されている。④高台はハの字に開き、断面三角形を呈する。などの諸点が挙げられる。灰釉陶器などの瓷器を模倣した形態的特徴から、大きく9世紀後半から10世紀前半の年代幅の中に位置づけることが許されよう。

そこで、黒色土器と有高台碗をキー・ワードに周辺に類例を探すと、岩槻支台の飯塚原遺跡1A号住居跡から南比企産須恵器や武蔵型甕と共伴する、大振りの内黒無台碗（5）がある。また同時期の東裏遺跡第33号住居跡でも器壁が薄く、内面をヘラミガキした後に黒色処理した無台碗（10）が見られる。この住居からは下野田稲荷原型（昼間2006）のロクロ土師器の皿・坏・埴（6

3. 近世の柄杓について

第5号井戸跡から出土した曲物柄杓について近世江戸遺跡から出土した類例（第46図）と比較検討しながら、その特徴を考えたい。

第5号井戸跡は、第1号掘立柱建物跡の東側に

～9）がまとまって出土したことで注目される。これらは下野田稲荷原遺跡第47号土塚出土例（11～15）に酷似しており、集落内における生産と消費の関係を示す恰好の例である。

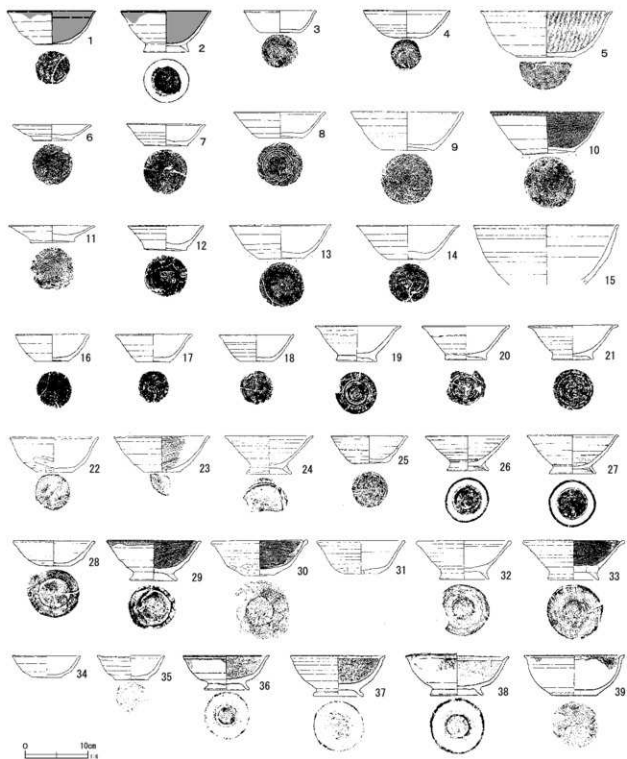
こうした無台碗の系譜ははっきりしないが、下野田稲荷原遺跡周辺からロクロ土師器の生産拠点が芝川流域の台地奥部へと拡大する中で、胴部上位に縦ヘラケズリを加え、底部を糸切りした特徴的な甕（末木2006）などの器種とともに黒色土器も定量で生産されていることが、和田北遺跡、御蔵山中遺跡、東北原遺跡などの土器焼成域の生産器種の様相に窺われる（富田1997）。

同様に有高台の坏・埴類の類例には、毛長川流域の自然堤防上に立地する三ッ和遺跡例（19～21）をはじめ、前述の東北原遺跡（24・26・27）、御蔵山中遺跡（32・33）、和田北遺跡例（36～38）などが管見にふれる。このうち黒色処理を施し、体部が湾曲気味に立ち上がり、断面三角形の高台をもつ水川神社東遺跡第6号住居跡例（29）や東北原遺跡第1号土塚例（26・27）が参考となる。

編年的な位置づけを整理すると、典型的な武蔵型甕の伴出する下野田稲荷原型段階よりも後出的であり、コの字状口縁が崩れ、器厚の厚くなった武蔵型甕に伴出する段階に位置づけられる。和田北遺跡のように小皿的な坏が出現する以前の段階である。

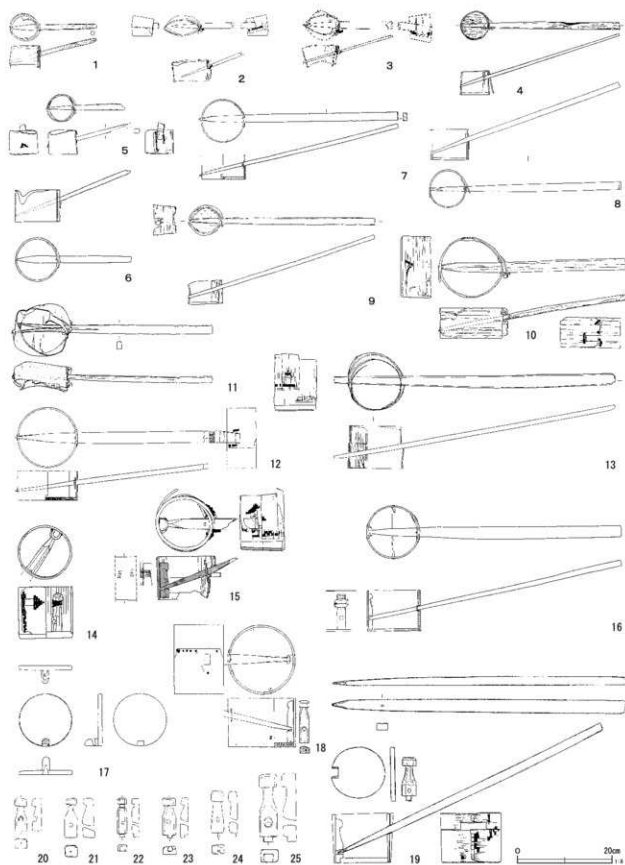
十分な検討とはいえないが、第16号土塚から出土したロクロ土師器の年代をひとまず9世紀末葉から10世紀初頭に位置づけておきたい。

隣接する規模の大きな素掘り井戸である。上部は漏斗状に開き、下部は円筒状を呈する。遺物は柄杓と農具の柄と考えられる棒状製品のほか、瀬戸美濃産皿・笠原鉢、丹波産播鉢などの陶器と在地



1・2 鈿上磯遺跡第16号土壘 3～5 飯塚原地遺跡1A号住居跡 6～10 東裏遺跡第5次調査第20区第33号住居跡
 11～15 下野田稻荷原遺跡第3次調査5区第47号土壘 16～21 三ッ和遺跡第2次調査土器一括埋納遺構 22～
 24 東北原遺跡第9次調査第3号焼成窯 25 東北原遺跡第5次調査第2号土壘 26・27 東北原遺跡第5次調査第1
 号土壘 28・29 氷川神社東遺跡第6号住居跡 30 御蔵山中遺跡第1次調査第15号土壘 31～33 御蔵山中遺跡
 第1次調査第16号土壘 34～39 和田北遺跡第4号住居跡

第45図 周辺遺跡出土のロクロ土師器



第46図 近世江戸遺跡出土の柄杓

産土師質平底焙烙が出土した。時期は出土した陶器の年代から18世紀中頃に位置づけられる。

柄杓は底板の半分を欠損しているほかは、ほぼ完存する。ただし、身は土圧によって大きく垂む。各部の大きさは、全長54.1cm、身径11.3cm、同高8.7cm、柄長54.6cm、同幅2.4cm、同厚1.2cm、小猿長7.5cm、同幅2.8cm、同厚0.8cmを測る。

出物柄杓は、円形の出物を身にして棒状の柄を取り付けたもので、柄の先端部が側板を貫通する構造のものが中心である(1-13)。これに対し、側板と柄の結合に「小猿」と呼ばれる柄受け用の固定具を用いたものが、近世に入り新たに出現する(14-25)。これにより柄杓の強度は飛躍的に向上したといわれている(市川1987、西村1994)。以下、江戸遺跡出土例と対比しながら本例の細部の観察を進めたい。

出物は円形を呈し、身の側板の打合(縦じ代)は右前に合わせる。側板端部を欠損しているため、上下縁にえぐりを入れていたかは不明である。側板の重ね合わせ部分の上寄りに方孔(2.1×1.1cm)をあげ柄孔とし、その両脇の2箇所を樹皮紐で縦じ合わせる。向かって左の側板端部は外1列2段で柄孔の部分長く縦じ、右は外3列1段で横転した三角形を呈し、装飾的な効果をもたせる。また内面の重ね合わせ部には縦平線縁のケビキを入れる。底部は平底で、側板と底板を樹皮紐で2箇所固定するのみで、木釘は用いない。

柄の先端は、側板内面に樹皮紐で縦じ留められた柄受け用の固定具(小猿)の孔に差し込む。小猿は直方体を呈し、括れ部で樹皮紐を2段に縦じただけで、底板との接合は特別な工夫はなされていない。江戸遺跡では底板に嵌め込むための「足」

と呼ばれる突起をもつもの(15・19・22・23・25)や、木釘を用いて(18・20・21・24)底板と固定している。中には汐留遺跡伊達家屋敷例(17)のように頭部の括れのない、簡略化した固定具も見られる。

柄は抜け落ちないように側板近くに木釘が打ち込まれる。柄の固定法にはこの他に楔や鉄釘を使用した例も存在する。柄は先端に向かって細くなり、小猿に挿入するために先端を尖らせる。柄の断面は方形で、面取りを施す。

柄杓の基本的な機能は、「水などの液体を汲む」ことであるが、その用途は実に多種多様である。その容量や柄の長さ・取り付け角度などによって、用途に応じて各種の柄杓が使い分けられていたと考えられる。

なお、柄杓にはこうした実用的な使い方のほか、社寺へ願掛けするときに、願いが汲み取れるようにと真新しい柄杓を、あるいは願いがかなった際に、底抜け柄杓を奉納するなどの風習が知られている(岩井1994)。興味深い事例として港区増上寺子院群(8)、新宿区崇源寺・正見寺(11)では17世紀中頃の早桶の中に六道銭などと一緒に柄杓が納められていた。柄杓はお伊勢まいり(ぬけまいり)のシンボルとして用いられており、被葬者が生前に伊勢まいりをした記念に持たせたものか、ついに果たせなかった伊勢まいりをあの世で実現させるつもりで納められたのであろう。

井戸跡から出土した本例が、単に不用品として廃棄されたものであるのか、あるいは呪具として何らかの願いが込められていたのか詳らかでない。今後の検討課題としたい。

第46圖 近世江戸遺跡出土の柄杓

1 中央区本郷元町遺跡 2・3・20-25 千代田区溜池遺跡 4 新宿区市谷田町一丁目遺跡B-27号遺構 5・17 港区汐留遺跡伊達家屋敷 6 千代田区溜池遺跡C区 7 新宿区尾張藩土屋敷跡遺跡第26地点 8 港区増上寺子院群光学院・貞松院跡・源興院跡 9 千代田区丸の内三丁目遺跡80号土坑 10 文京区小石川後楽園遺跡C区 11 新宿区崇源寺・正見寺跡 12 新宿区尾張藩土屋敷跡遺跡第38地点 13 港区No.19遺跡38号遺構 14 葛飾区葛西城跡 15 千代田区一橋高校校地遺跡 16 さいたま市約上院遺跡第5号井戸跡 17 新宿区尾張藩土屋敷跡遺跡第44地点 18 港区汐留遺跡臨坂家屋敷・屋敷境堀

引用・参考文献

- 市川秀之 1987 「西ノ辻遺跡出土の中世木器」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ』大阪府教育委員会
- 岩井宏實 1993 「曲物の技術」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 国立歴史民俗博物館
- 岩井宏實 1994 『ものゝ人間の文化史 75・曲物』法政大学出版局
- 越前谷理 2007 「平安時代の土器焼成遺構に関する基礎的考察—埼玉県三芳町新聞遺跡群の事例をもとに—」『国土館考古学』国土館大学考古学会
- 埼玉地区文化財担当者会 2007 『埼玉の遺跡』埼玉地区文化財担当者会報告書第6集
- 末木啓介 2006 『足立郡における9世紀後半から10世紀の煮炊具について』『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会
- 田中広明 2003 『古代集落の再編と終焉』『中世東国の世界1 北関東』高志書院
- 富田和夫 1997 「関東西部—武蔵国を中心に—」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編
- 西村 歩 1994 「天川村曲物考—奈良県吉野の事例を基礎とした曲物製作技法の研究—」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要2』財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 岩間孝志 2006 「ロクロ土師器の流通—ロクロ土師器からみた武蔵国東部の古代社会—」『古代武蔵国の須恵器流通と地域社会』埼玉考古別冊9 埼玉考古学会
- 南 博史 1987 「曲物の形態と用途」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』創元社
- 滝辺 一 1986 『歴史時代の土器について—非北武蔵系土器群の様相』『八木木遺跡』川口市遺跡調査会報告第9集

第10表 写真図版遺物番号対応表

図版13 土器類	18 第10号井戸跡 (第22図23)	磁石
1 第5号掘立柱建物跡 (第10図1)	19 第10号溝跡 (第16図10)	10 第5号井戸跡 (第21図10)
2 第5号井戸跡 (第21図7)	20 遺構外 (第42図5)	11 第7号井戸跡 (第22図20)
3 第7号井戸跡 (第22図17)	21 遺構外 (第42図6)	12 第7号井戸跡 (第22図19)
4 第16号土壇 (第27図2)	第11号井戸跡陶器類	金属製品
5 第16号土壇 (第27図3)	22 第11号井戸跡 (第22図24)	13 ビット82 (第32図1)
6 第6号土壇 (第31図6)	23 第11号井戸跡 (第22図25)	14 第7号井戸跡 (第23図1)
7 第6号土壇 (第31図10)	24 第11号井戸跡 (第22図26)	15 第7号井戸跡 (第23図2)
図版14 磁器碗	25 第11号井戸跡 (第22図27)	16 第7号井戸跡 (第23図3)
1 第7号井戸跡 (第22図15)	26 第11号井戸跡 (第22図28)	17 第9号井戸跡 (第23図4)
2 第7号井戸跡 (第22図16)	焙烙	18 第23号土壇 (第31図12)
3 第6号土壇 (第31図5)	27 第2号溝跡 (第16図3)	第4号井戸跡鉄鏝
4 第4号溝跡 (第16図5)	28 第4号溝跡 (第16図7)	19 第4号井戸跡 (第23図5)
5 第5号土壇 (第31図2)	29 第9号井戸跡 (第22図22)	土製品
6 第6号土壇 (第31図4)	30 遺構外 (第42図7)	20 第8号溝跡 (第16図12)
陶器碗・皿・香炉	かわらけ	21 第7号井戸跡 (第22図29)
7 第4号溝跡 (第16図6)	31 第6号井戸跡 (第21図11)	桃核
8 第5号井戸跡 (第21図4)	32 第4号土壇 (第31図1)	22 第6号井戸跡 (第21図14)
9 第5号井戸跡 (第21図5)	図版15 磁器碗・香炉	23 第9号井戸跡 (第22図30)
10 第6号井戸跡 (第21図12)	1 遺構外 (第42図4)	図版16 木製品
11 第6号土壇 (第31図8)	2 第7号井戸跡 (第22図18)	1 第14号井戸跡 (第24図5)
12 第9号土壇 (第31図11)	3 第9号井戸跡 (第22図21)	2 第7号井戸跡 (第23図9)
陶器控鉢	須恵器瓶・坏	3 第5号井戸跡 (第24図1)
13 第5号井戸跡 (第21図8)	4 第7号溝跡 (第16図8)	4 第7号井戸跡 (第23図10)
14 第5号土壇 (第31図3)	5 第10号溝跡 (第16図9)	5 第7号井戸跡 (第23図16)
15 第6号土壇 (第31図9)	6 第1号溝跡 (第16図2)	6 第7号井戸跡 (第23図15)
陶器控鉢	7 遺構外 (第42図1)	7 第7号井戸跡 (第23図22)
16 第4号井戸跡 (第21図2)	8 遺構外 (第42図2)	8 第9号井戸跡 (第24図3)
17 第5号井戸跡 (第21図6)	第16号土壇磁石	
陶器甕	9 第16号土壇 (第27図4)	